

「子どもたちに福音を」

東播磨中央教会 吉田 美穂



その子の姉はファラオの娘に言った。「私が行って、あなた様にへブル人の中から乳母を一人呼んで参りましょうか。あなた様に代わって、その子に乳を飲ませるために。」
出エジプト2・7

私はそんなに熱心ではない神道の家に生まれましたが、母が友だちを作るために近所にあるキリスト教主義の保育園に入れてくれました。保育園の思い出はほとんどないのですが、食前の祈りは覚えています。また保育園の頃のアルバムを見て、クリスマスの降誕劇を思い出す程度です。そんな私ですが、私の心にはしっかりと神さまとイエスさまの姿が刻まれています。何か困った時や不安な時に祈る対象は保育園で聞いた神さまでした。

選んではせていた聖書の箇所は、モーセが生まれた頃の場面です。エジプトにへブル人が増えたので、ファラオは生まれた男子を殺す命令を

出しました。モーセの両親は3か月信仰によって隠して育てましたが、隠しきれなくなり、ナイル川の葦あしの茂みに置くと、それをファラオの娘が見つけ、乳母として実の母を雇いました。その時に真の神さまを信じる信仰が養われたのです。

子どもに福音を語ってもどこまで信じることができるか、みことばが記憶されているかわかりませんが、私自身の経験から、イエスさまがどのようなお方かわからなくても、イエスさまの姿が魂の奥深くで記憶されているように思います。私は大学時代、統一協会に入信しました。そこで教えられるイエスさまの十字架は失敗だったということがどう考えても信じられなかったのです。それは、保育園の頃に聞いたイエスさまの姿と違つと心で魂で感じたからです。教会学校で、近所のお友だちを招いた子ども集会で子どもたちに語られたみことばがいつ花開くかはわかりませんが、たとえそれが水の上にパンを投げるような働きであっても、いつの時代も子どもたちに福音を語っていかねければならないことを思います。信仰継承のためにも神さまに期待して祈りつつ、喜んでご奉仕させていきたいと思います。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「神様の子どもを育てるために(1)」	3
— 幼な子とともに生きる —	3
年始 ▲ 1 / 7 ▼	11
キリストの十字架への道 ▲ 1 / 14 3 / 24 ▼	17
復活 ▲ 3 / 31 ▼	83
カリキュラム	89
「牧羊者」のご購読・ご利用について	90
おわりに	90

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセーじ例の最後の「さんび」の略記について
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」、イン新：「教会学校さんびか 新版」（以上、インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

神様の子どもを育てるために（１） —幼な子とともに生きる—

後藤 真



全体の目次

今号（二〇二三Ⅳ）

Ⅰ、今、信仰共生を

—信仰共生についての問題意識

Ⅱ、聖書に見る信仰共生

次号（二〇二四Ⅰ）

Ⅱ、聖書に見る信仰共生（続き）

Ⅲ、幼い魂とともに

—信仰共生の課題と取り組みのヒント

Ⅳ、神様との出会い

—私の原点についての証

二〇〇九年に牧羊者に掲載された教師養成講座を、再掲載するというお話をいただきました。原稿を読み返してみると、当時とは大きく考え方が変わった点がありました。そこで、大枠は維持しつつ、いま大切になっている点について修正を加えて、再度原稿を書くことにしました。

変わった点は「信仰継承」から「信仰共生」への価値観の変化です。変わっていない点は、この働きのためには、教会と家庭が一体となり、熱意をもって取り組まなければならないということです。

それぞれに置かれている現状が違います。子どもたちも一人ひとり違います。全員に当てはまる話はできません。

ん。問題提起の一つとして受け止め、それぞれに子育てや教会学校の現場に合わせて考えてください。

また、ここで取り扱うのは信者家庭の子どもたちのことです。教会に地域の子どもたちが集まることは素晴らしいことです。しかしその子どもたちへの対応は、信者家庭の子どもたちへの対応と大きく違います。その点についても後に触れます。

最後に、課題の性質上、本来のこの紙面の目的であるCS教師養成からは、広がりすぎている部分があります。そのことをご了承ください。

I、今、信仰共生を

1、信仰継承から信仰共生へ

「新聖書辞典」(いのちのことば社)で、「信仰」ということを調べると、このような説明が書かれています。

「神に対する信頼。そしてそこから当然起こる神のことばに対する信頼を言う」

「これは人となつてくださった神の御子イエス・キリストの人格とみわざの上に、あるいはその中にすべて

をゆだねるところが信仰であることを示している」

「事業を継承する」という場合、前任の経営者は引退し、次の経営者が知識・技術・資本・権利を受け継ぎます。リレーでバトンタッチする場合も、バトンを渡した人は走り終えてコースから出ます。

「信仰を継承する」という場合、信仰を継承させる側はいつ引退し、受け継ぐ側はいつから受け継ぐのでしょうか。神様に信頼し、イエス様にゆだねるという意味での本来の信仰は、召される日まで引退することはありません。信仰は世代の重なりと連続性の中で、ともに生きることを通して、まわりの人たちの生き方をお手本にして、身につけるものです。

信仰継承ということばを使うとき、聖書の知識や教会での奉仕、会計や建物、教団という組織を継承させることをイメージしていいでしょうか。しかし、それらを受け継ぐことと、信仰に生きることとは必ずしも一致しません。

年長者の考え方ややり方、これまで作ってきた組織や集まりを一方的に押し付けて「継承しろ」と言われたとしたら、若い人たちは戸惑いを感じます。若い人たち、

子どもたちからも多くの学ぶべきことがあります。すべての世代がお互いにより影響を与え合う信仰共生こそが、本来の信仰と共同体のあり方です。

2、育てる苦勞と恵み

信仰共生の恵みについて、堺栄光教会のことを証します。現在、堺栄光教会では毎週の礼拝出席者の三分の一、約20名ほどが30代以下のメンバーです。青年、中高生の多くは、礼拝前後にも集まり、説教の分かち合いをしたり、互いのために祈り合ったり、ゲームをしたり、楽しい時間を過ごしています。

いま原稿を書いているこの週末、青年たちが自分の友だちを教会に誘うために「ゴスペルフェスティバル」という集会を企画し、準備に勤しんでいます。役員会では、彼らの必要のために予算を取り、教会全体で応援しています。

これは、これまでの牧師、宣教師が子どもたちを育てた結果です。また、中高生や青年たちを家に招き、ごちそうをし、たびたび交わりの機会を提供してくださった、愛にあふれた信者の方々の献身の結果です。

教会としての意識的な取り組みとしては、一九九三年の教会総会において、

「青年の結婚―クリスチャンホーム形成―信仰継承―青年の結婚」のサイクル

が宣教方針として打ち出され、教会形成の土台に置かれたことが始まりです。それ以来、信者家庭の子どもたちのクリスチャンホーム形成のために取り組んできました。

いま堺栄光教会で若い人たちが生き生きと活動しているのは、これらのことに30年取り組み続けてきたことの結実です。

3、信仰共生を考える二つの視点

① 聖書が示す信仰共生

聖書は信仰共生ということはどう考え、どう教えているのでしょうか。まず聖書から、信仰共生の姿を見ます。

② 乳幼児期の子どもたちへの取り組み

0歳から2歳までの乳幼児期の子どもたちへの取り組みについていくつかのことをお伝えします。これは子ども

もたちだけへの取り組みだけではなく、親や保護者も含めての取り組みです。

乳幼児は、非常に多くのものを吸収します。自分に接する親やまわりの大人たちが大切に行っているものを敏感に感じとります。みなさんの教会ではこの大切な時期の子どもたちにどのような働きかけをしていますか。

また、乳幼児を持つ親は、非常に多くのことに気を遣います。子どもの世話をすることで、礼拝から取り残されているように感じる場合もあります。みなさんの教会ではそういった親に対してどのような働きかけをしますか。

そのようなことを改めて振り返る機会としていただければと願います。

Ⅱ、聖書に見る信仰共生

1、聖書の中の信仰共生の姿

信仰共生という視点で聖書の記事を調べると、親から子へ、あるいは教会やイスラエルという共同体単位で、信仰を共に生きることが非常に意識的に、行われている

ということが分かります。またそのことは、【主】である神様の明確な意思でもあります。

時代や社会の背景が違いますので、それをそのままではめることはできません。しかし、いくつかの原則は現代の教会の現状に應用できる原則として受け取ることができると思います。ここでは信仰共生に関して、四つの項目について取り上げます。

①信仰共生は自動的にはなされない

信仰をと共に生きるということは、自動的にはなされません。

サムエルを育てた祭司エリの実子二人は、神様を恐れず、父親であるエリの言葉にも耳を貸さず、罪を犯し続け、悲惨な死を遂げます（Ⅰサムエル4章）。ソロモンのように最初はダビデと同じ信仰を生きていても、異国の女性をめとり、その悪影響を受けて異教の神々を礼拝するようになる場合もあります。（Ⅰ列王11章）。

イスラエルという特別に選ばれた民の社会において、しかも祭司や王の家庭においても、子どもたちが信仰から離れてしまいました。ましてや異教社会に生きる私た

ちにとって、信仰の共生はなおさら困難です。

「教会学校に通い、中学生になったらバイブルキャンプに行って決心し、洗礼を受ける」というような自動コースはありません。「中学生になったら教会を離れる子どもについての対策を、教団の次世代育成プロジェクトが何か考えてくれないだろうか」というような発想は責任放棄です。

子どもたちは一人ひとり違います。いちばん近くにいる親や教会の大人たちが個別に向き合い、いっしょに信仰を生きたために格闘するしかありません。信仰を共に生きたことは、プログラムや行事ではなく、目の前の大人たちといっしょに生きたことで身に付くものです。

一方で、異教社会であるからこそ信者の家庭に生まれるということが大きな恵みであることを意識することが必要です。

ミッションスクールに通っている高校生が「学校の聖書の時間に聞くことがあまりにも簡単すぎてつまらない」と話すのを聞きました。信者家庭に生まれ幼い頃から教会に通っている子どもは、聖書の知識においても大きく違います。

多くの教会学校ではこの差がほとんど考慮されていません。信者の子どもたちも、そうでない子どもたちも同じプログラムで、同じ教育を与え、同じライフスタイルに生きるように促します。大人の求道者に求道者クラスなどで対応するのに、子どもに関しては「こちゃまぜです」。

「信者の家庭に生まれる」という絶好のチャンスが無駄にしないようにしたいと思います。信者家庭の子どもたちの理解や生活に合わせたありかたで、彼らとともに学び、彼らとともに信仰を生き、ともに神様の祝福を受け取る経験をする必要があります。

②ともに礼拝を献げる

私たちの信仰の中心は礼拝です。礼拝をおろそかにして奉仕や宣教はできません。真実な礼拝者となることは信仰の土台です。また、共同体とともに献げる礼拝は信仰共生の本質です。

聖書の中の礼拝の記事から、二つのことを取り上げます。

一つは、アブラハムがイサクをささげた場面です。まさにアブラハムがイサクに手を下そうとした時、御使い

が言います。

その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。

(創世記22・12)

イサクはこの前の箇所で、いけにえの動物がないことをアブラハムに尋ねています。イサクは礼拝についての知識を持っていました。しかし、イサクはこの経験で、知識以上のもの、神様を恐れて従う、真の礼拝を経験しました。イサクを献げたアブラハムと、たぎぎの上に身を横たえたイサクは父子とともに礼拝を献げたのです。

イサクも祭壇を築いて礼拝をささげる者となります。礼拝とともに経験するということを通してアブラハムの信仰の大切なものを、イサクも生きるようになります。それがヤコブ、ヨセフと続いていきます。

教団の50周年記念行事に際してに聖餐式が持たれました。会場の都合で、子どもたちは聖餐式の行われたホー

ルに入ることができませんでした。制約がある中で運営にあたられた方々を非難するつもりはありません。ただ、あの場に子どもたちがいっしょにいたなら、神様の豊かな臨在と、教団に注がれてきた恵みを、ともに感じることができたのではないかと思います。

もう一つは新約聖書のエペソ人への手紙です。六章の冒頭に次のように出てきます。

子どもたちよ。主にあつて自分の両親に従いなさい。これは正しいことなのです。(エペソ6・1)

新約聖書の公の手紙は、礼拝に集った人々の前で朗読されてきました。「子どもたちよ」という呼びかけで始まります。手紙は礼拝の場で朗読されたと考えられています。子どもたちも、礼拝の中で自分たちに対する語りかけとともに聞きました。子どもが礼拝者の一人として尊重されていたこと、礼拝の中で自分たちに語られることばを聞く機会があったことが想像できます。

礼拝の知識、聖書の知識は子どもだけを集めて教えることができます。むしろそういったことがらに關して

は、教え・教えられる、受け継がせる・受け継ぐ関係の中で学ぶことが有効です。

しかし、御霊と真理によって献げられる礼拝の場にもいるということ、神様の臨在にともに触れ、神様のことをともに聞くということは、実際に経験しなければ知ることができません。神様の前に出る厳肅さは、知識ではなく体験して身につくものです。高齢の方から赤ちゃんまで、同じ共同体のメンバーとして、霊的な経験を共有することこそ、信仰共生の本質です。

③家庭における生活

旧約聖書には、家庭で行われる信仰の教育について繰り返し記されています。

たとえば出エジプト記に次のような記事があります。

あなたがたの子どもたちが「この儀式には、どういう意味があるのですか」と尋ねるとき、あなたがたはこう答えなさい。「それは【主】の過越のいけにえだ。【主】がエジプトを打たれたとき、【主】はエジプトにいたイスラエルの子らの家を過ぎ越して、私

たちの家々を救ってくださったのだ」。

(出エジプト12・26～27)

過越はイスラエルにとってもっとも大切な祭りです。それは各家庭で行われました。そして子どもがその儀式の意味を父親に問い、父親が答えるということを通して、意味が共有され、祭りをともに経験するということになりました。

また新約聖書ではイエス様の両親となった、ヨセフとマリアの姿から多くのことを学ぶことができます。ヨセフとマリアは、生まれたイエス様に、律法に定められた通りに割礼を施し、神殿でささげものをし(ルカ2・21～24)、過越の祭には家族で神殿に巡礼しました(ルカ2・41～42)。

イエス様の家庭は、ヨセフとマリアの真実な信仰に支えられた家庭ではなかったかと思われます。ヨセフとマリアの親としてのあり方―律法や宗教行事を大切にした敬虔な生活―は幼いイエス様によい影響を与えたでしょう。

もちろん、特別に宗教的なことを教えたり、そこに子

どもを参加させたりということだけではなく、普段の家庭生活そのものが信仰共生の場でもあります。申命記にはこうあります。

聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。私が今日あなたに命じるこれらのことは心を尽くしなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家で座しているときも道を歩くときも、寝るときも起きるときも、これを彼らに語りなさい。（申命記6・4～7）

これは文字どおり始終律法のことばかり語ると受け止めることもできますが、心から神様を愛して律法に従って歩む生活すべてこそが、子どもたちに伝えるべき信仰の姿勢である、とも解釈できるでしょう。

神様と隣人を愛し、食べるにも飲むにも神様の栄光を表す。そういう生き方が、家庭の日常生活の中で子どもたちへ信仰のありようを語ります。子どもは親を見て育

ちます。背中で語る信仰には強い説得力があります。逆に教会でどのように立派に振る舞っていても、家庭での姿が信仰とかけ離れたものであれば、子どもは信仰から離れるでしょう。

（続く）

（※「牧羊者・二〇〇九年度Ⅱ巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。）

聖書

詩篇23・1〜6

タイトル

主は羊飼

暗唱聖句

【主】は私の羊飼。／私は乏しいこと
詩篇23・1
がありません。

目 標

主を牧者として生きる生涯の幸いを味わ
う者となる。

導入

(和田牧子)

皆さんは真珠^{しんじゆ}つて見たことがありますか？ パールともよばれ、海にある貝からとれる宝石のひとつです。シンブルなだけでなく、なんとも言えない清らかな美しさをもっています。今日の聖書箇所、詩篇23篇は「詩篇の真珠」ともよばれ、美しく力ある輝^{かがや}きをはなっているみことばです。私たちの心とたましいを励ましてくれます。

主は私の羊飼

最初に「【主】は私の羊飼」とありますね。皆さんは羊飼いが羊を飼っているところを見たことはありませんか？ 先生は写真や絵で見たことがあるくらいです。頭に布やぼうしをかぶって、先っぽが曲がった長い杖^{つえ}をもっている羊飼いです。聖書の神さまは、まさに羊飼

のような方です。そして私たち人間は羊飼いに守られている羊のような存在なんです。

羊は目がよく見えず、迷いやすい動物といわれています。一匹だけでは生きていくことはできず、群れとなつて、羊飼いさんに大切に育てられて生きています。羊飼いは緑の牧草のあるところ、十分な水のあるところをよく知っていて、そんな場所に羊たちを連れていってくれるのです。だから羊はお腹をすかすこともなく、のどがかわいてフラフラになることもなく、元気に成長していくことができます。何といっても安全と、休息と、食べ物がなくては、動物も私たち人間も生きていくことはできません。

神さまは、私たちの生命^{いのち}を守り、そしてただ生きるだけではなく、こころからだとたましいがすこやかであるために必要なすべてのものを用意し、与えてくださる方なのです。聖書のみことばで私たちを励まし、祈りの中で神さまとおはなしをし、毎日いろいろなことができる中でも神さまから新しい生命をいただいて生きていくのが私たちなのです。

死の陰の谷を歩むとしても

4節には「たとえ 死の陰かげの谷を歩むとしても／私はわざわいを恐れません。／あなたが ともにおられますから」とあります。皆さんも、熱が40度ぐらいまで上がって、うなされて、ただただおふとんに横たわっているしかないような体験をしたことがあるでしょう。学校やお家うちでつらいことがあつて、心が重く、「死にたい!」と思ったこともあるかもしれません。でも恐れなくていいのです。なぜなら、「あなたがともにおられますから」。

羊飼いはむちや長い杖を使つて、羊たちをねらうけものたちを追い払い、羊の前に立ちほだかつて、守り助けます。それと同じように、私たちにとつてどんなこわい敵であつても、重い病氣や苦しみであつても、一緒にいてくださり、ともにたたかつてくださる羊飼いなるイエスさまがおられるので、私たちは恐れる必要がないのです。そのときはあまりにも苦しくて恐れや不安でいっぱいになることがあるかもしれませんが、あとから思えばたしかに力強いイエスさまが助けてくださっていたんだな…とわかることがあります。ですから皆さんも苦しいとき、病氣のとき、ぜひ今日のみことばを思い出してください!

追いかけてくる恵み

詩篇23篇の最後にはおもしろいことが書いてあります。「まことに 私のいのちの日の限り／いつくしみと恵みが 私を追つて来るでしょう。」皆さんはオニごっこをしたことがありますね。逃げてても逃げててもオニ役のお友だちが後ろから追いかけてくると、こわいし疲つかれてしまふでしょう。でも神さまとともに生きる人生は、いつくしみと恵みが、どこまでも私たちを追いかけてくるというのです。「いつくしみ」とは「思いやり、優やさしさ、ゆるし」という意味があります。「恵み」とは「神さまの愛からくる救い、贈おくりり物」という意味があります。私たちにとつて良い物、なくてはならない物のすべてが羊飼いである神さま、イエスさまによって豊かに豊かに、追いかけるように贈られ続けるのですね。

結び

こんなイエスさまに守られているからこそ、私たちは元気に立ち上がり、いただいた良い物をまわりのお友だちにも分けてあげることができるのです。どうかそのようなすばらしい一年の出発となりますように。

♪ハ、ハ、ハレルヤ♪(PW1、イン62、イン新75)

聖書 詩篇23・1～6 テーマ 主は羊飼いです

序論

(石田高保)

詩篇の中で23篇ほどクリスチャンの口にのぼるものも少ないでしょう。なぜそれほどにも愛されているのでしょうか。それは思うに主の圧倒的な恵み深さが心に迫るからだと思います。全世界、全時代のクリスチャンが心の支えにしてきたみ言葉と言ってもよいでしょう。

一、主の養い

1節は23篇の中心テーマで、これは作者ダビデの信仰告白です。羊は羊飼いにまったく依存しています。羊飼いがいなければ生きることができないほど世話がいるそうです。あまりにも弱いので羊飼いは昼も夜も見張っておかなければなりません。しかし羊からすれば羊飼がいるだけで全ての必要は満たされ、安心できます。私たちも羊飼であるイエス様といのちの関係を持っているゆえに霊的にも物質的にも満たされることができます。

2節には羊飼いの羊に対する責任が明確です。私たちの霊と心とからだの必要は何かのノルマを達成しなくて

も主が満たしてください。親が子どもを無償で育てるのと同じです。ですからイエス様が私たちの面倒を見てくださることについて何ら心配する必要はありません。すべての人には一般恩寵として生まれながら生かされる権利が与えられているのです。

3節で牧草と水に飽き足りた羊はいのちを吹き返します。そのようにみ言葉と聖霊によって再起動されるなら、〈御名のゆえに〉主の責任によって〈義の道〉、つまり神のみこころに導かれるということです。私たちは必ずしも主の用意した最善を選ぶとは限りません。それどころか次善三善、ときには最悪の選択をすることもあるでしょう。そのように道を外れた場合でも、イエス様は去る者は追わずではなく、一匹の羊を命に代えて連れ戻してください。これは贖いの道です。

二、主の守り

4節は私たちが恐ろしい体験をしているときの強力な励ましのみ言葉です。自分に何らかの危険が迫っているとき、こわがるのは人間として当然の反応です。恐れという感情は危険を知らせるシグナルだからです。これが機能しなかったら自分を危険にさらすことになるでしょ

う。ですから決して不信仰のしるしではありません。羊飼いは羊の矢面に立ちます。危険に向かって恐れを克服し、羊の群れを一匹たりとも失わないように守らなければならぬというプレッシャーにさらされます。このようにときに勇気を出せと自分に言い聞かせてもカラ元気しか出ないでしょう。けれども目には見えなくても主は共におられるという信仰こそ、勇気の源です。「あなたがわたしと共におられる」と主に向かって告白するのは、極めて親密な関係である証拠です。ここには原語においてインマヌエルに通じる言葉が使われています。不正が行われているとき、良いこと正しいこと筋の通ることを行うのは勇気がいります。ここは波風を立てないように黙っておこうという誘惑も働くでしょう。初めから恐れに降伏し、長いものに巻かれるなら勇気は要りません。しかし正しいことを貫こうとすると、主は動き出して下さいます。またこのむちと杖は羊を痛めつけるものではなく、むちによつて襲いかかる獣を撃退し、杖によつて羊の群れを導くものです。ですから慰めとなるのです。

5節は不思議な光景です。いったいどの誰が敵陣の前で宴会を開くでしょうか。この場合のホストはイエス

様、ゲストは私たちです。生死をかけた戦争をしようという極限状態ではご馳走も喉を通らないはずです。それでも食事ができるのは主が敵に対してバリアを張っておられるからです。イエス様は人生の様々な敵が私たちを打ち負かすことを許しません。私たちに触れる者は主の瞳に触れることだからです。さらに宴会は進み、クライマックスは主が私たちの頭に香油を注いで下さることです。私たちが主に従おう、み言葉に従おうとするなら、主は聖霊に満たしてイエス様のにじみ出る生活を送らせてくださいます。生身の罪深い人間がふだんの生活で聖霊に満たされるとは何と光栄なことでしょうか。神様が私たちを単なる人間扱いではなくイエス様扱いして下さっている証拠です。

6節は牧羊犬が羊を群れから外れないように追うさまとも言われ、〈追つて来る〉、私たちが主の恵みといつくしみを求める以前に私たちを追い求めて下さったからにちががあるのです。そして主は追い求めることはやめなさいません。恋い慕っておられるからです。

結論

自分の確かさではなく主の確かさになちましよう。

研究資料

(小平徳行)

本篇は、牧者として、その民を導き守ってくださる主に対する感謝と信頼に満ちた詩である。スボルジョンは「詩篇の真珠」と呼んだ。前半（1～4節）は主を牧者にと見え、後半（5～6節）は客をもてなす主人にと見え

テキスト

1 **「主」は私の羊飼**い 神は羊飼いとして、その民イスラエルを守り導かれるお方である。このような告白はイスラエルの歴史の古くから見られる（創世記49・24、イザヤ40・11、エゼキエル34・11など）。また支配者や王も牧者と表現された（Ⅱサムエル5・2、7・7、エゼキエル34・2）。ここでは、神とその民一般との関係ではなく、「私の」とあるように、神との個人的な関係が告白されている。神を牧者として表すことは、同時に自分を羊にたとえることを意味する。羊が弱く、自己防衛力を持たず、近視眼的で迷いやすい動物であるように、自分もそのような存在であり、羊飼である神に全存在をゆだねていることを告白している。また羊は財産として飼

われているゆえ、所有者はこれを大事にする。神は羊飼いであると共に、所有者である。ダビデは自分が主のものであることを自覚して、信頼していた。**乏しいことがありません** 主は必要を満たしてくださるお方。この事はイスラエルの歴史において、特に荒野の40年間の旅路において体験された事実である（申命記2・7）。

2 **緑の牧場** 柔らかい草の生えている場所。**伏させ** 安心して草を食べ、身を横たえることのできる安全な状態を意味する。**いこいのみぎわ** 疲れと渴きをいやす水が豊かにある所。牧草や水はいずれも羊の生命を支えるものであるが、パレスチナにおいて牧草と水は乏しく、優れた牧者によってのみ探し当てられる。か弱い羊の一切は牧者にかかっており、牧者なしには飢えと猛獣の危険に対する確かな守りを得ることはできない。

3 **主は私のたましいを生き返らせ** 弱っている魂に生命の活力を呼び戻すこと。特に、霊的な食物である神の言葉によって養われ、神との関係の回復や深化によって魂の平静が与えられること。**御名のゆえに** 救い主としての神のご性質にあずからせるため。聖なる神はご自身の民も聖であることを望まれる。**義の道** 誤りのない

道、または救いに至る道と解釈することもできる。「義」は両者の真つ直ぐな関係（最も近い関係）を表わす。

4 死の陰の谷 狭く険しく見通しのきかない場所。パレスチナには深い谷があり、猛獣がそこに住んで、しばしば羊を襲ったと伝えられている。**むち** 先に鉄の金具の付いたこん棒で、獅子や狼を追ひ払うために用いられた。**杖** 「よりかかる、支える」という動詞から派生した語で、曲った柄のついた大きな杖のこと。山路を歩く時の支えや羊を数える時、さらには迷いやすい羊を懲らしめるために用いられた。**慰めです** 保護と導きだけでなく、懲らしめや訓練を慰めと捉えている。

5 私の敵をよそに：食卓を整え 遊牧民の生活において、逃亡者は天幕の主人の好意によって安全を確保される。主の守りは、敵の前で平然と食事ができるほど安全で確実である。アブサロムの追手を目前にしながら、バルジライにもてなされたダビデの体験は、このような主の守りの具体例である（Ⅱサムエル17：27～29）。**香油を注いでください** これは任職の儀式としての油注ぎではなく、喜びの象徴である（詩篇45：7、133：2）。主が客人の頭に香油を注ぐことは、パレスチナでは客を

歓迎する時の習慣であつた。**私の杯は** あふれています 豊かなもてなしを受けている様子であり、主のあふれる恩寵を歌っている。

6 私のいのちの日の限り 直訳すると「生涯のあらゆる日々」。順境の時も逆境の時も。いつくしみ「善」良い事」の意。**恵み** 契約に基づく愛を意味する。追つて来るでしょう 主に従う者には恵みが追つて来るが、悪者には暗闇と滅びが追ひかけてくる（詩篇35：6、140：11）。**私はいつまでも** **【主】の家に住みます** ダビデにとつて神との交わりの場である神の宮で過ごすことが最大の喜びであつた（詩篇27：4、61：4）。「主の家」は現実の神殿の建物ではなく、神の名の置かれている場所、神がご自分を啓示される場所。イエスは万人が祭司として主の宮に住む事ができるように、私たちが自由に神との交わりにあずかれるようにしてください（ヘブル10：19～25）。ダビデは新約的な信仰を先取りしていたといえる。

参考図書 小林和夫「詩篇」『新聖書註解・旧約3』、鍋谷堯爾「詩篇を味わうⅠ」、C・H・スボルジョン「ダビデの宝庫」（以上のいのちのことば社）、他。

聖書

マタイ16・13〜20

タイトル

ペテロの信仰告白

暗唱聖句

あなたは生ける神の子キリストです。

マタイ16・16

目 標

イエス・キリストへの正しい信仰を告白する者となる。

導入

(後藤 真)

「イエス様ってどんな人？」と聞かれたら、みなさんはどのように答えますか。「昔の人」「聖書に出てくる人」「マリアさんの子ども」「すごい奇跡をした人」「お祈りを聞いてくれる人」…いろいろな答えが出てきそうですね。わたしなら、「この本にくわしく書いてあるから読んでみて！」と言って、聖書を渡してしまいます。

人々はだれと言っているか？

イエス様は弟子たちに、

「人々は人の子をだれだと言っていますか」

と、聞きました。「人の子」とはイエス様のことです。

弟子のひとりが答えました。

「バプテスマのヨハネだと言う人たちもいます」

バプテスマのヨハネは、人々に悔い改めるように教え、バプテスマを授けていました。救い主が来る前に、人々を導き、準備するために遣わされた人でした。バプテスマのヨハネはとてもすばらしい預言者でしたが、悪い王様に捕まって殺されてしまいました。このバプテスマのヨハネがよみがえったのがイエス様だと思っていた人がいたのです。

「エリヤだと言っている人もいます。」

エリヤは預言者でした。死なないで、神様がつむじ風に乗せて天に昇らせたので、もういちど地上に来ると信じられていたのです。

「エレミヤのような預言者のひとりだと言っている人もいます。」

イエス様の語ることばや奇跡を見て、旧約聖書の時代の預言者のひとりだと思っていた人もいました。イエス様はひとりなのに、人々の中にはいろいろな見方がありました。正しい答えは、いったいどれなのでしょううか。

あなたがたはわたしをだれと言ったか？

イエス様はこんどは弟子たちに

「あなたがたはわたしをだれと言うか」

と、聞きました。弟子たちはイエス様のことをどう思っていたのでしょうか。ちゃんと分かっていたのでしょうか。弟子のひとり、ペテロが代表して答えました。

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」

イエス様は神様です。イエス様はキリスト、救い主です。これが弟子たちの答えでした。

いつもいっしょにいて食事をしたり寝たりしているイエス様が神様だとは、ふつうは思わないでしょう。イエス様は立派な方だと思っても、聖書に約束されている救い主キリストとまでは分からないでしょう。イエス様はペテロに言いました。

「あなたはしあわせです。天の父なる神様が、あなたにこのことを分かせてくださったのです。」

イエス様が神様だなんて当たり前だよ、という人がいるかもしれませんが。イエス様が救い主だなんて常識よ、という人もいるかもしれませんが。でも、それはわたしたちの知恵でわかったことではなくて、神様が聖霊をおととして教えてくださったことなのです。聖書を詳しく研究しているのに、このことを信じないという人もたくさんいます。当たり前！というくらいいっしょに信じているわ

たしたちは何としあわせなのでしょう！

天の御国（神の国）の鍵

イエス様は続けて言いました。

「あなたはペテロ（岩）です。この岩の上に教会を建てます。また、あなたに天の御国の鍵を与えます」

マタイの福音書を最初に読んだ人たちは、どんなに厳しい迫害があっても教会は力強い岩の上に立っているのだと、このことばを力強く感じたでしょう。

また、「天の御国」とは、神様の国、神の国のことです。「天の御国の鍵」とは「神の国の生き方」を教える権威のことです。神の国では、神様の思いを受け止め、神様の思いに従って生きます。この神の国の生き方が、どれほどしあわせなことかしつかり伝えなさいと、イエス様はペテロと弟子たちに伝えたのです。

わたしたちも神様に従って生きるしあわせを伝える働きを任されています。これが

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と、信じているわたしたちの生き方です。

♪イエスさまがいちばん♪（ホ68、イン旧25）

聖書 マタイ16・13〜20 テーマ キリストへの信仰告白

序論

(宮澤清志)

イエスが弟子たちに尋ねられた「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」との問いかけに、ペテロが代表して「あなたは生ける神の子キリストです。」と答えました。この答えは主イエスを満足させる答えでした。ペテロの答えは、今も主イエスを信じ救いに入る信仰告白そのものであり、ここからクリスチャンの信仰の歩みが始まっています。

一、キリストに土台する

これまですでに、弟子たちは仕事も家族も捨ててイエスに従ってきました。イエスをキリスト(救い主)と信じていたからです。ヨハネの福音書では、ペテロとヨハネ・アンデレの兄弟はイエスとの出会いの最初からイエスをメシアと信じ、告白してきました(ヨハネ1・14)。群衆がイエスを「ダビデの子」すなわちメシアと告白したことさえもありました(マタイ9・27)。

一方サドカイ人やパリサイ人たちは、イエスを悪霊にとりつかれた人と同様に扱い、次第に群衆たちも彼らの影響を受けイエスから離れていくようになりました。このような動きは弟子たちの間でもなされてきたものでした。例えば五千人の給食を間近で見た群衆たちは、「わたしは天から下って来たパンです」と語ったイエスの言葉につまずき、イエスと群衆たちとの論争を聞いていた多くの弟子たちも離れ去っていったとあります(ヨハネ6・1〜69)。

「信仰を告白する」といいますが、一回的に信仰を告白することはできるかもしれませんが、あるいは調子のいい時にイエスを主と告白することはできるでしょう。しかし、この個所における「信仰の告白」とは、多くの群衆や弟子たちが主のもとを立ち去りながらもなおその信仰に立ち続けるということなのです。

そのために必要なものは「土台」です。土台がしっかりしていれば、多少の風雨や地震では決してぐらつくことはありません。群衆が離れ去り、弟子たちがもはやイエスとともに歩もうとしなくなったとしても、「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永

遠のいのちのことばを持っておられます。」(ヨハネ6・68)と、自らはその信仰を告白する者となり続けることができるのです。

二、教会の交わりの中で

イエスはペテロのこの信仰告白に対して、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。」と答えられました。この〈岩〉(ギリヤ)ペトラとは、ペテロが代表して言い表わした信仰告白です。個人的に主に申し上げるだけでなく、様々な違いを持つ人間が一つに集まって、同じ主を仰ぐ交わりの中で告白する現実の中に生きることです。

主が自分を愛し、赦し、受け入れてくださっているその恵みに感謝しながら、人をさばくことはできません。もしそんなことがあっても、主の御顔を仰ぐ時に、自分の心が砕かれていきます。

同時にこのペテロの信仰告白は、ペテロだけの告白ではありません。ペテロをはじめとする教会の告白です。この告白をし続けることは、並大抵なことではできません。もしも、信仰者が独りだけで立っているとすれば、

何かちょっとしたことですぐに倒れてしまうことでしょう。しかし、その信仰が教会の信仰となり、私たちが主をかしらとする教会の交わりの中にとどまり続けているならば、その信仰告白はさらに強固なものになります。「一人なら打ち負かされても、二人なら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。」(伝道4・12)のです。

教会はただ人が寄り集まっているのではなく、キリストを中心として交わるために、召し集められているのです。すべての人のために来られたキリスト・イエスは、まず一握りの弟子たちを選び、教え導き、イエスを主と信じ告白する者の愛の交わりを広げていくように、身をもって教えられました。

結論

同じキリストに接ぎ合わされて豊かに生かされている私たちです。これからもイエスによって共に生かされていることを感謝し、信仰告白そのものや、これに基づく賛美、また日々の交わりをもって、互いに主に結ばれた恵みを表わしていきましょう。

研究資料

(井上義実)

有名なペテロの信仰告白の個所となる。ガリラヤや北方での伝道は間もなく終わり、十字架に向かってエルサレムに上られる時が近づく。その前に、イエスは弟子たちとの交わりを十分に持とうとされたのである。

テキスト

13 ピリポ・カイサリア 現在のシリアのバニアスに当てる。ヘロデ大王がアウグストゥスから割譲され整備し、息子のピリポが、皇帝に敬意を表してカイサリアと改名した。地中海沿岸のカイサリアと区別するため、ピリポの名を冠してピリポ・カイサリアと呼ばれた。人々は人の子をだれだと言っていますか イエスとは誰か、イエスをどう捉えるかとの問いかけである。今日も、人々はイエスについて、それぞれに自分の考え、受け止め方を持っており、私たち全てへの根本的な問いかけと言える。

14 バプテスマのヨハネ…エリヤ…エレミヤ…預言者の1人 バプテスマのヨハネは、すでにヘロデの手で殺されている(14・1以下参照)。ヨハネの使信と生き様は、同時代の人々に鮮烈な印象を残した。エリヤは終末までに、再び

現れるという預言が残されている(マラキ4・5)。エレミヤの再来は聖書には言及がないが、外典には触れられている。ユダヤ的伝統の中で、エレミヤという名が上がつている。預言者のひとりという認識は曖昧で、評価も前者より低いものである。

15 あなたがたは、わたしをだれだと言いますか イエスの問いかけは他の人のことではなく、あなた自身はどうなのかと、個人に問いかけられている。

16 あなたは生ける神の子キリストです ペテロの信仰告白は、並行個所となるマルコ(8・27-30)では「キリスト」「ルカ(9・18-21)では「神のキリスト」とのみ記されている。キリストには、メシアとしての意味が込められている。生ける神の子という言葉には、イエスの神性が表されている。救い主の使命をこの世の圧政からの解放と見るか、永遠の救いをもたらす魂の救いと見るかには大きな違いがある。ペテロの告白は天につながるものである。

17 血肉ではなく 血肉(ギ)サルクス・カイ・ハイマ) 血と(「と」は接続詞)肉という三語から成っている。神性と対比する人間性を表す言葉で、ヘブル的表現である。人間からではなく、聖霊によって、ペテロはイエスを神の子と

告白した。

18 あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます ペテロ(ギ)ペトロス) 切り出された石。岩(ギ)ペトラ) 石ではなく大きな岩の塊を表す。岩の上に教会を建てるとイエスは言われた。この岩とは何かということが歴史上問われてきた。主要な考え方として、岩とは、①ペテロ個人を指す。②ペテロの信仰告白を指す。③イエスの教えを指す(7・24)。④イエス自身を指す。と、四つの考え方がある。ローマカトリック教会は①ペテロ個人とする。ペテロの監督権が教皇に継承されており、カトリック教会の権威を主張する。カルタゴの主教キプリアヌスによってカトリック統一論として体系化された。プロテスタント教会は②ペテロの信仰告白とする。ペテロの信仰告白とする最も古い言及は、クリュソストムスに見られる。バークレーは、「岩はただ神のみであるが、教会はペテロと共に始まった。ペテロは教会の基礎と言えよう」と記す。

よみの門(ギ)プライ・ハデユウ) 新改訳第三版「ハデスの門」が直訳である。よみと訳されたように死後の霊が存在する場所である。より懲罰的な意味合いではゲヘナ「地獄」が用いられる。教会は死と滅びに対して、勝利を持ってい

ることが宣言されている。

19 天の御国の鍵を与えます ペテロは聖霊が降ったペンテコステの日、エルサレムで復活のイエスを証しする説教を行った。三千人の者がイエスを信じ洗礼を受けた(使徒2章参照)。ペテロは、初代エルサレム教会の働きを進めた。さらにカイサリアのローマの百卒長コルネリウスの家では異邦人が救いを受けた(使徒10章参照)。ペテロが天の御国の鍵を用いることで、多くの神の業が進められていった。地上でつなぐこと…地上で解くこと… ユダヤ的な伝承において、律法の教師が用いる表現である。あることがらについて、つながれるということは禁じられることを意味する。解くということは許されていることを意味している。ペテロは、天的な権威をイエスからいただいた。ペテロが力を使用するのではない。ペテロが神の御心を地上に正しく示すことが目的である。

20 弟子たちに…命じられた 厳格に命じられたという強い意味がある。イエスがキリストであることを証しする時がまだ来ていないゆえである。

参考図書 Leon Morris (Erdmans) 他

聖書

マタイ16・21〜26

タイトル

十字架を負って

暗唱聖句

だれでもわたしについて来たいと思うな

ら、自分を捨て、自分の十字架を負って、

わたしに従って来なさい。マタイ16・24

目 標

自分に与えられた十字架を負い、キリストに従う者となる。

導入

(後藤 真)

知らないおじさんに「お菓子をあげるからついておいで」と言われてもついていく人はいませんね。わたしたちの心の中には、得をするならついていこうかなあ、何かもらえるならついていこうかなという気持ちがあるのが気をつけなければなりません。

イエス様にもたくさんの方がついて行きました。でもほとんどの人が、病気を直してほしい、パンが欲しい、イエス様に何かしてもらいたいという気持ちでした。イエス様についていくということは、本当はどういうことなのでしょう？

叱られたペテロ

イエス様に、

「あなたがたはわたしをだれと言うか」

と尋ねられ、

「あなたこそ、生ける神の子キリストです」

と百点満点の答えをしたペテロでした。そこでイエス様は、救い主とはどういうものなのか、これからイエス様がどういう道を歩いていくのかということを、弟子たちに教え始めました。

イエス様に反対している人たちがたくさんいるエルサレムに行くこと。長老や祭司長や律法学者たちからたくさん苦しみを受けて殺されること。三日目によりがえること。それは、つらくて苦しい道でした。

イエス様の話を聞いていた弟子たちは、イエス様が何を言っているのか分からなかったでしょう。弟子たちは、救い主は新しいイスラエルの王様になって、国を立て直す方だと思っていたからです。そしてイエス様こそが新しいイスラエルの王様になる方だと思っていたのです。

我慢できなくなったペテロは、イエス様をわきに引つ

1月

21日 礼拝メッセージ例

張って、

「とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません！」

と、強く言いました。イエス様は振り向き、

「下がれ、サタン。わたしをつまずかせるものだ。あなたたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と、ペテロを厳しく叱ったのです。

イエス様について

イエス様は弟子たちに向かって言いました。

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従ってきなさい。」
イエス様がこれから歩いてゆく道は十字架の道でした。それはイエス様が自分から喜んで歩きたかった道ではありません。自分の思いではなく、神様の思いに従って歩む道でした。

イエス様はどうして、樂をしてお金持ちになる道を弟子たちに用意しなかったのでしょうか。どうしてイスラエルの王様になって弟子たちを大臣にしてやらなかったのでしょうか。

それはイエス様の救い、永遠のいのちが、お金や大臣

の身分よりも、全世界よりもずっと値打ちがあるものだからです。そしてそれは十字架以外では、どんなにお金を払っても買い戻すことができないものだからです。

それぞれの十字架

わたしたちは、イエス様と同じように十字架にかかって死ぬわけではありません。また人と同じことをしなければならぬわけではありません。わたしたちはそれぞれに「自分の十字架」があります。

「十字架を負う」と聞くと、とても大きなことをしなければならぬような気がします。でも十字架を負うということは、自分を喜ばせるのではなく、神様の喜ぶことを選ぶということなのです。たとえばそれは、兄弟におやつをゆずるといふことや、つらい思いをしている友だちを慰めるといふた、ふだんの生活の中にもあることです。

自分の十字架は何かな？と考えてみましょう。まず、人にゆずったり優しくしたりする小さなことから始めてみましょう。

♪歩こうイエスの道を♪(PW15、イン81、イン新101)

聖書 マタイ16・21～26 テーマ 十字架を負う生涯

序論

(高橋頼男)

十字架の死と復活を予告された後、イエスは弟子たちに言われました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」。十字架を負う生涯とは、主イエスが歩まれ、そしてわたしたちが歩むべき道とは、どのような道でしょうか。

一、イエスが歩まれた道(21)

イエス様は、十字架に歩まれ、ご自分が受ける苦難の数々を具体的に弟子たちの前に示し、また、あからさまに語られました。そして後、「だれでもわたしについて来たいと思うなら…」と言われました。クリスチャン生涯は、「わたしに従って来なさい」と言われる主に従い、主の歩まれた道(主の弟子としての道でもある)すなわち十字架の道を歩むことです。

そもそも、弟子(disciple)とは主の模範に習う者であり、その道において主の訓練(discipline)を受ける者で

す。私たちが、主の弟子、クリスチャンであろうとするなら、主に倣^{なま}って自分を捨て、自分の十字架を負い、主に従うことの覚悟をしなければなりません。

しかし、それは、主が歩まれた道です。そこには、主が私のために歩まれた跡がくつきりと残っている道です。その道を、主の足跡を確かめつつ、私たちもまた、一足一足辿らせていただくのです。

二、神の^{なご}み心を優先させる道(24)

〈自分を捨て〉 主の道を歩むためには、自分の道(自己追求の道)を歩むことはできません。主の道と自分の道は、決して交わることがありません。主の道を歩もうとするなら、まず、自分の道を行くことを断念すること、すなわち、自分を捨てる覚悟が必要です。私たちの前には、しばしば主の道を選ぶか自分の道を行くか、二つの選択があります。そこにおいて、主の道、み心の道を選び取ることができるなら本当に幸いです。

主イエスのゲツセマネにおける祈りは、私たちの大切な模範です。主は、ゲツセマネにおいて自分の願いを言い表わしつつ、父の^{なご}み心を求めて切に祈られました。ご自分の願いと、父の^{なご}み心との狭間で長い苦闘の祈りをな

された後、十字架にかかることこそが父のみ心であることを確信された主は、ついに十字架の道を選びとられた（マタイ26・36～46）。

時に、私たちも主のみ心を求めつつ、苦しい祈りをすることがあるでしょう。それは、決してたやすい祈りではありません。しかし、主が助け、聖霊が励まして祈らせてくださいます。信じ、従って、み心を選び取った時、勝利と確信がきます。

「キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び」（ヘブル5・8）とあります。私たちは、とりわけ苦難の中で、祈りを通してキリストに従うこと、すなわち、苦難の中でキリストの従順を学ぶべきです。その時、本当の意味で、主の信仰と服従を身につけるのです。

三、神が各人に備えてくださった道（24）

〈自分の十字架を負って〉 主の道は、十字架を負う道です。キリストが私たちのために十字架を担われたように、今度は、私たちがキリストの十字架を担うべきです。もちろん、主が負われた十字架そのものを、私たちが負うことはありません。また、そのようなことはで

きません。私たちが負う十字架とは、キリストを信じ、キリストに従って生きる時、主がそこに備えられたキリストのための苦しみをしつかり受け留め、担うことなのです。しかも、恵みの賜物として負うことです（コロサイ1・29）。

主は、わたしたちのことを良く御存じで、それぞれにふさわしい十字架を備えられ、それを負って私に従ってくるようにと導いてくださいます。私たちは、主が負わせてくださる十字架を避ける事もできますが、避けないで逃げないで、しっかりと担いましょう。今日、主が、負わせられる私の十字架はいったい何でしょうか。

結論

十字架は確かに、苦しい道、困難な道ですが、主が共におられる道であり、主の助けがあり、必ず主の復活に続く道であることを覚えましょう。そして、主が前におかれた希望をもって御苦難を忍ばれたように、十字架の道にある希望を忘れないようにしましょう。

「No Cross No Crown」（十字架無くば冠なし）。自分に与えられた十字架を負って、喜んで主にお従いする者とならせていただきますように。

研究資料

(中島啓二)

イエスは弟子たちに、ご自身が救い主としてどのような道を歩まれるかを、このとき初めて示された。それは彼らの(誤った)期待を裏切る、十字架の苦難と死という道であった。その道を弟子たちもまた歩まねばならない。私たちもまたキリスト者として、自分を捨て、自分の十字架を負うことによって、イエスに従っていくのだという決意を表明せねばならないのである。

テキスト

21 そのときから イエスが公の宣教を始めた時(4・17)と同じ表現。福音書の中で大きな転換点として、ここからイエスの死に焦点が合わせられた第二段階が始まることを示す。**エルサレム** そこは聖なる都であると共に、預言者の殉教と深い関わりのある地であった(23・37、ルカ13・33等)。**殺され** 直前の個所での告白(16・16)でペテロが心に思い浮かべていたことは全く正反対のことである。**三日目に** 「三日」は12・40ではヨナのしるしとの関連で、また26・61他では神殿の破壊と再建の暗喩(あやめ)で登場する数字。旧約ではホセア6・2に「三

日目に」という表現がある。**よみがえ(る)** 主の復活は28・1他で成就し、初代教会の信仰告白の中心要素となる(1コリント15・4、使徒2・23(24他))。**くなければならぬことを** ここに告げられたことは、弟子たちにはあり得ないことのように思えるが、神の意志による必然以外のなにものでもないことを示す。

22 **イエスをわきにお連れして、いさめ始めた** 古代の師弟関係において、弟子がその師を(特に公の場で)批判することは、最もしてはならないことの一つであり、ペテロはそのルールを破った。イエスの示した真のメシア像は、ペテロの胸中にあつたメシア像とは全く相容れないものであつた。ペテロに限らず当時のユダヤ社会の人々が思い描いていたのは、民族を抑圧から解放する「勝利に満ちたメシア」だったのである。**とんでもないことです** 直訳は「あなたに(神の)慈悲が(あるように)」で、文脈上「そんなことが起こるのを神がお許しにならないように」の意になる。**そんなことがあなたに起こるはずがありません** この強い否定表現はペテロのメシア理解が間違つたものであつたことを如実に示している。

23 **下がれ、サタン** 意図せずとはいえ主の十字架の道

を否定し神の意志に背いたペテロを、イエスは荒野での誘惑者に対するのと同じように糾弾した(4・10)。「わたしをつまずかせるものだ」「岩(18)であるペテロは「つまずきの岩」(イザヤ8・14)になってしまった。

24 だれでも 直接には弟子たちに語りつつ、全ての人(後世の教会を含む)にも向けられている。自分を捨て、自分の十字架を負って 次節の「わたしのためにいのちを失う者」と合わせ、「イエスとその福音を証しするために、死さえも恐れずに、命をかけてイエスに従う生涯を全うすること」と理解すればよいだろう。「捨て」、「負って」が不定過去形であるのに対し、従って来なさいは現在形。それは、従うということが一回限りのことではなく、継続的な事柄であることを意味する。

25 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです ここには逆説的な原理がある。「失う」「見出す」は未来形で、終末的な審判を示唆する。「いのち」(ギリッシュケー)は、単なる肉体の命ではなく、より深くより根源的な意味での人間の真の存在の意。「いのちを見出す」ことは「救い」と同義と見て良いだろう。利己的に自分の存在を守ろう

とする人は、イエスの弟子としての本当の献身のあり方を知ることができず、最後には皮肉にも、自分が守ろうと躍起になってきたものを失って終わる。一方、真の弟子は、なくてはならないただ一つのもの、他のものとを並べることをしない。そしてキリストに従うことを貫き通すときに、すべてにまさる栄光の富を受けるのである。

26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか 4・11の荒野での誘惑を彷彿させる表現。サタンはイエスにこの世界の栄華を見せて誘惑した。富の誘惑は道をそれさせる強い力である(6・19-21)。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか 「自分の力で買い戻すことは絶対にできない」という意の反語表現。そのいのちを与えるための価は、罪なき神の御子にしか払えなかったのである。私たちは、ただ流された血潮の尊さを思い、恵みに感謝して、喜んで自分の十字架を負いつつ、イエスに従っていかう。

参考図書 注解書 増田誉雄(新聖書注解)、D. H. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible) その他 The IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

マタイ17・1～8

タイトル

山上での変貌

暗唱聖句

これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け。

マタイ17・5

目標

栄光の主キリストを覚え、御声を聞き、従うものとなる。

導入

(土屋開夫)

皆さんは、イエス様のことを「神様のひとり子」だと信じていますか？ そう信じているなら幸いです。

でも、イエス様は私たちと全く同じ「人間」の姿で来て下さいましたね。背中に天使のような羽がついてる訳でもなく、頭に輪っかがついてる訳でもなく、体が光ってる訳でもありません。だから、見た目では神の御子であることは全く分らないと思います。

今日はそんなイエス様が、お弟子さんたちの代表3人に、神の御子としての栄光の姿を、一瞬だけ見せてくださった場面です。

シヨックを受けていた弟子たち

その前に、先週のお話をちよつと思ひ出してください。イエス様は弟子たちに、これからご自分が多くの苦しみを受け、十字架につけられて殺され、三日目によりみがえられる事を話されましたね。

それを聞いたペテロさんはビックリして、「主よ、そんなでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」(16・22)と言いました。ペテロさんはその少し前に、「あなたは生ける神の子キリストです。」と告白していました。「神の子であり、救い主であるイエス様が、最も悪い犯罪人がつけられる十字架で死刑にされるなんて絶対にあります！」と思ったのです。

ペテロさんがそう思うのは無理ありませんね。他のお弟子さんたちもそう思ったでしょう。イエス様が言われたことは本当の事ですし、イエス様が十字架で死んで下さらなければ私たちは救われません。でも、この時のお弟子さんたちにはとても理解できない事です。し、気持ち的にとても受け入れられなかったのです。「イエス様が十字架で死ぬなんて…」と、ただただ悲しく、シヨックを受けたのです。

まるで稲妻のように

一番ショックを受けたのはペテロとヤコブとヨハネだったかも知れません。最もイエス様を愛していたのでしょう。イエス様はその3人を連れて、高い山に登られました。聖書には「山」がよく出てきますが、「この世を離れて神様に近づく」意味があると思います。

その山頂に着いた時、なんとイエス様の姿が変わりました！「顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった」(2)のです！これはイエス様の「神のひとり子」としての本来の栄光の輝きを、ほんの少しだけ見せてくださったのです！いつもは、イエス様は私たちと同じ普通の人間の姿でいて下さいます。だってイエス様がふだんから太陽のように眩しかったら、あるいは雷のように恐ろしかったら、とても私たちは一緒にいることは出来ませんね。

でも、イエス様はこの時だけ特別に、栄光の姿を少しだけ見せてくださったのです。それは、ペテロとヤコブとヨハネの信仰を強めるためだったのではないのでしょうか。

「神の子のイエス様が十字架で死なれるなんて…」と

思っていたペテロさんたちに、確かにイエス様は栄光の神の子である事を教えられたのです。

栄光とは

ところで皆さん、「栄光」とは何でしょうか？ただ単に眩しく光っていることが「栄光」ではありません。

「栄光」とは、父なる神様に従う者に与えられる、神の栄えの光です！イエス様は父なる神様の御心に従い、また私たちを愛する愛のゆえに、苦しい十字架に立ち向かい、死んで復活されました。モーセさんもエリヤさんも素晴らしい働きをしましたが、全ての人を救うため、全ての罪を身代わりに受け、十字架に架かられたのは、神のひとり子イエス様だけです！イエス様だけが救い主なのです！

イエス様に従って

「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け」と、天から父なる神様の御声があつたように、私たちもイエス様に従って共に歩きましょう。苦しみにも負けず、最後まで従い通すなら、あなたにも神の子どもとしての栄光が与えられるのです！

♪歩こうイエスの道を♪(PW15、イン81、イン新101)

聖書 マタイ17・1～8 テーマ 山上での変貌

序論

(石田高保)

聖書は、イエス様にあらゆる角度から照明を当て、私たちが安心して主に任せられるようにしています。

一、イエス様を知る

私たちにとってイエス様とはどういうお方でしょうか。一般的には、四大聖人の一人、西洋の神様、人類の偉大な教師、キリスト教の開祖などと言うでしょう。しかしペテロは「あなたは生ける神の子キリストです」と告白しています(16・16)。つまりこの私を救って下さるまことの神です。どのように救って下さるのでしょうか。自分から進んで十字架にかかり、命を投げ出すことによってです。まったく罪も汚れもない、人となられた神だからこそ、私たちの罪を取り除くことができます。ではあなたにとってイエス様とはどういうお方でしょうか。

イエス様はペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて高い山に登られました。いつもと違う、ただならぬ雰囲気を感じたことでしょう。〈弟子たちの目の前でその御姿が

変わった。顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった〉。弟子たちは三年半、イエス様と一緒に生活してきましたが、見たことのない姿に変貌するのを見て、畏れの念に捕らわれました。これは明らかにイエス様が普通の人間ではない事実を表しています。主が人間として生まれできたことは間違いないことですが、その生まれ方は超自然的であり、父親の介在がなく、聖霊によって宿られました。これはキリストなる神が原罪を避けて人間となるための唯一の方法でした。それからは普通の人間として生きますが、神の国を宣べ伝えるようになってからは、奇跡の数々によって自分が神であることを隠そうとはしませんでした。しかし今日の出来事のように、姿を変えたのは最初で最後です。なぜイエス様は神々しく変貌した姿を弟子たちに見せたのでしょうか。ご自分が間違いない神の子であることを明らかにするためです。

二、イエス様を見る

これを見た弟子たちの生涯にどのような影響が及んだのでしょうか。このことは終生忘れぬ経験となり、弟子たちの信仰を強めました。「私たちは、キリストの威光の目撃者：私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からか

かったこの御声を自分で聞きました」(Ⅱペテロ1・16-18)。ペテロはイエスの変貌する姿をこの目で見ましたが、私たちも聖書を読んだり、説教を聞いたり、み言葉を分かち合ったりするとき、神の言葉を聞き、イエスの姿を信仰の目で見ることが出来ます。栄光のイエスを見るとは、突き詰めれば主をいつも目の前に置くことです。それは心をかき乱す思いや出来事に目を奪われるのではなく、イエス一人のほかには、だれも見えなかった」というように、主を透視することでしょう。ペテロが訳の分からないことを言い出した時、天から声がして(彼の言うことを聞け)と言われました。損得勘定で頭がいっぱいになってしまったとき、祈りをもって主に尋ねることであり、み言葉と聖書の価値観で物事を判断し、従ってゆくことです。私たちはこの世と神の国と両方に足を置いています。目に見えるこの世界は、何の努力をしなくても見ることが出来ますが、目に見えない神の国は、意識的に目を注ぐという努力が要ります。栄光に輝くイエスを見るとは何か神秘的な体験というのではなく、主を見えるように信頼するという営みです。ふと気がつけばイエス様と会話している自分を発見する、そういう世界です。

〈イエスと語り合っていた〉。どんなことを語り合っていたのかというと、「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について」(ルカ9・31)、つまり十字架の死についてです。モーセは律法の代表、エリヤは預言の代表、つまり旧約聖書は人類の救いを完成するキリストの死に全神経を集中させています。

またペテロはこの山で聞いた神の声を、手紙の中でも書いています。〈これはわたしの愛する子〉、この言葉は、主が間違いなく神の子であることにお墨付きを与えています。私たちは、これを自分に語りかけられた言葉とは考えないかもしれませんが、確かに第一義的には、イエス様にかけられたお言葉です。しかし第二義的には、私たちに語りかけられていると受け取ってよいのです。キリストの血潮のゆえに罪ゆるされ、神と和解し、神の子とされた人は、神の目には愛する子であり、その存在が無条件に受け入れられています。

結論

このみ言葉を自分にも語り掛けられていることを自覚し、愛されている自分を受け入れましょう。

研究資料

(宮澤清志)

この記事は、マルコ9・2～8、ルカ9・28～36にも登場する。

テキスト

1 それから六日目に 珍しく明確な数値である。このことは、前述したとおり、前の個所（ペテロの信仰告白ほか）との関連性の深いことを強調するものと考えられる。ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて「だけ」とは、直訳すると「ご自分のものに從って」となる。これは、この三人がイエスの側近の者であったことを暗示する。この三人はこの個所の他にも「ヤイロの娘のよみがえり」（マルコ5・37）、そして「ゲッセマネの祈り」（マタイ26・37）においても立ち会うことがゆるされた。

2 御姿が変わった（ギ）メタモルフォー） 着替えることに表される、表面的な変化ではなく、根本的な変化を指す。あのグロテスクな蛹さなぎが羽化して美しい蝶へと変化するような変化を指す。輝き この変化の神々しさを

語る。白く この輝きが天的なものであることを語る。

3 モーセとエリヤ この二人については様々に理解されている。モーセは神から律法を付与された「律法」の代表者であり、エリヤは「預言者」の代表である。しかも彼らは山において神と直接語った経験があり（出エジプト31・18、1列王19・9～12）、彼らは二人とも当時の人々からは死んでいないと思われ（Ⅱ列王2・11参照）。またモーセについてもユダヤの伝承では死ななかったとされている）、そして何よりメシヤの時代にはこの二人は戻ってくると信じられていた。語り合っていた ただ単に話しをするだけではなく「会談する」「協議する」という意味がある。この三人は何を「会談」していたのか。ルカは「イエスがエルサレムで遂げようとする最後のこと」（9・31）と語る。この「最後のこと」（ギ）エクソドス）が出エジプトをも意味する言葉である事は、この後起こるエルサレムでの出来事（十字架と復活）が、出エジプトの出来事の踏み直しであることを示唆する。

4 私がいかに幕屋を三つ造ります… マルコはこのペテロの言葉に関して、彼らの恐れゆえに何を語ったらいかがわからずにこの言葉を発した、と解説する（9・

6)。なお、ペテロのこの言葉の真意は定かではないが、当時、古代中近東の世界では、大切な客には敬意を払ってテントを立てる習慣があった。ペテロはイエス、モーセ、エリヤの三人に対する敬意から、咄嗟にこの言葉を発したのではないかと推測できる。

5 光り輝く雲 雲は、旧約聖書においては神の臨在のしるしとして登場する（出エジプト24・15～18、40・34～38）。マタイはこの雲に「光り輝く」を付け加え、この雲が神の目に見える栄光の輝きであることを強調する。これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ（詩篇2・7とイザヤ42・1からの引用である。子とは、いわゆる血縁関係という意味ではなく、父なる神との関係において父なる神から遣わされ、なすべき働きへと任じられたという意味である。ちなみに詩篇2・7は、イスラエルの歴史において、王の即位式において歌われた詩であり、イエスが王の王、メシアであることの父なる神の宣言であると言える。一方イザヤ42・1は、メシアはしもべであることを意味する。本節に表されるメシアは、王であり、かつしもべでもあるのである。なお、この言葉はイエスのバプテスマに際しても語られており（3・

17）、イエスの王としての就任式に語られた言葉が再び受難の前にして繰り返されたことになる。そして、このイエスの言葉に聞くようにと神は語られるのである。

6 三人の弟子たちの、この神のみ声を聞いた反応が示されている。ひれ伏した とは、直訳では「彼らの顔の上に倒れた」となり、ひれ伏して顔を上げられない状態を指す。このような、神の聖なる臨在に触れ、圧倒される体験は、聖書中様々な個所にみられる（イザヤ6・5、エゼキエル1・18～2・1、ダニエル8・17など）。この恐れこそ、礼拝における鍵であり、神の臨在と神の御声のあるところには必ず生じるものである。

7～8 イエスが近づいて ここでのイエスは弟子たちが見慣れたイエスであった。イエス一人のほかには、だれも見えなかった ここに、律法の終わりと預言者の成就がキリストによってもたらされたと見る者もいる。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』（いのちのこ
とば社）・A. T. Robertson 「Word Pictures in the New
Testament」 (BROADMAN) 他

聖書

マタイ18・1-5

タイトル

子どものように

暗唱聖句

向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。

マタイ18・3

目標

子どものようにへりくだった心で生きる。

導入

(和田牧子)

皆さんは、お友だちやきょうだいと毎日楽しく遊んでいますか？ ときには勉強やスポーツや外見などで、だれが一番上かなんて話題にすることがあるでしょうか。教会学校のおともだちが「うちのクラスにはマウントがあるんよ。上のグループの人をおこしたら、あつというまにクラスでいじめられちゃうんよ」と教えてくれました。そのようなクラスで毎日学校生活を送るのはつらいですね。イエスさまはどうおっしゃっているでしょうか？

だれが一番？

実はイエスさまの弟子たちはしばしば「だれが一番えらいのか」でもめていたのです。天の御国みくにには地位や階かい

級きゅうがあると思っていて、自分こそイエスさまの次にえらい場所に行きたい！ と考えているような、そんな弟子たちでした。「わたしが一番上だから一番えらいのさ。」「いえいえ、いちばん若いわたしこそイエスさまに愛されていて、天の御国でも一番なんだよ。」「よし、それならイエスさまに聞いてみよう」となったのでしょうか。「イエスさま、天の御国では、いつたいだれが一番えらいのですか」と弟子たちがイエスさまにたずねました。

子どものように

するとイエスさまは一人の子どもを呼びよせて、弟子たちの真ん中に立たせてこう言われたのです。「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国には入れません。」弟子たちはびっくりしたでしょうね。「向きを変えて」とは「心をいれかえて」という意味です。心をいれかえて子どもたちのようにならなければ、いちばん上どころか、天の御国に入ることもできないなんて!? 弟子たちはすばらしいイエスさまの弟子として選ばれて、いっぱいお手伝いしてきたから当然天の御国にいくて、しかもイエスさまのみそばで高い地位が与えられるとかなんちが

いしていたのですね。

自分を低くする

イエスさまは続いて言われました。「だれでもこの子どものように自分を低くする人が、天の御国でいちばんえらいのです。」小さな子どもは、まだひとりでは生きていきませんね。大人にお世話をしてもらわなければ、食べることも着ることもできません。大人がそばにいてくれることで安心し、大人に守られて生活している弱い存在です。イエスさまは「天の御国に入るためには、自分とはとるにたらない小さなものですと気づかなければなりません」と教えられたのです。

何かを一生懸命努力して、りっぱな成績をおさめたり、得意なことをがんばって賞を取ることはすばらしいことです。「がんばったね」とほめてもらおうとすなおにうれしいものですよね。でもそれでほかの人を見下げたり、自慢して、自分がほかの人よりえらいと思うようになるなら、それは自分を高くする生き方です。

大人になっても、お仕事で活やくしたり、有名になったり、あるいは高級な持ち物をもっていることで、人とくらべてわたしはえらいんだと思ってしまう誘惑がある

のですね。年上だから、経験が豊かだからと、「わたしが正しい、あなたはまちがっている」とまわりの人の意見を聞かなかつたり……。イエスさまを信じていても、信じているからこそ「こうあるべき」「いやちがう！」などといふけんかになってしまふ人たちもいます。

イエスさまこそが、天の神さまの御子であるにもかかわらず、低く低くなつてくださって、地上での最後には十字架の刑まで受けてくださいました。罰を受けるようなことは何ひとつなさらなかったのに、私たちのおろかな罪を引き受けて十字架の死をとげてくださったのです。

結び

私たちはこのイエスさまの大きな愛の前には何をしたらって小さな子どものような弱い存在です。皆さん一人ひとりの価値は人のことばやクラスのマウントなどできないものではありません。神さまがそんな小さな私たちを変わずに大切な宝物として愛してください。そのことを忘れないで心を低くし、お祈りしながら歩んでいきましょう。

♪何がそんなに♪（イン68、イン新83）

聖書 マタイ18・1～5 テーマ 子どものように

序論

(中島啓二)

この世は優劣に基づく序列が幅を利かせます。そしてそんなこの世の価値観が、ともすれば教会の中にさえ入り込もうとします。しかし天国の前味である教会は、その侵入を許してはなりません。主イエスが弟子たちに教えられた、天国の価値観とはどのようなものでしょうか。

一、だれが偉いかを気にする弟子たち

弟子たちが主イエスに、「天の御国では、いったいだれが一番偉いのですか」と尋ねましたが、主は先にご自身の死と復活を予告していました(17・22～23)。後に主が同様の予告をされた直後にも、ゼベダイの子たちは御国での特別な地位を求め(20・17以下)、最後の晩餐の最中でさえ、弟子たちはだれが偉いかで争論していたのです(ルカ22・24)。主がご自身の受難と復活について何度語っても弟子たちの関心は自分たちの序列でした。本来ならば、主イエスを十字架へと追いやる自分たちの罪深さに目を向けねばならなかったにもかかわらずです。

これは、彼らだけの話ではありません。私たちもまた、私たちの罪のために贖^{あがな}いの犠牲となってくださった主イエスの十字架の血潮の恵みを忘れるときに、教会は一致を失い、さばき合いや序列争いに終始してしまうのです。

二、子どものように自分を低くする

天国ではどちらが上か、などと競い合っている時点で、天国に入ることすらできません。そうならないために、主イエスは「向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません」と言われたのです。「向きを変えて」とは、「悔い改めて、心を入れかえて」と訳せる言葉です。優劣を競い合うこの世の価値観から、全く違うものへと方向転換しなくてはなりません。それは「子どもたちのように」なることだと言うのです。

しばしば誤解されることが、ここで主イエスは、子どもの素直さ、無垢性などについて語っているのではありません。もし主イエスがここで無垢性(実際は子どもといえども神の前には罪人ですが)について語っているとしたら、その条件を満たして天国に入れる人は一人もいないでしょう。そうではなく、主がここで語ってい

るのは、子どもの弱さや依存性についてです。当時のユダヤ社会では、子どもはちっぽけで取るに足りないもの、たとえに用いられました。もちろん子どもをそのように見なししていたのは当時の人々であつて、主イエスにとつては子どもも価値ある存在です。だからこそ主は彼らを「真ん中に立たせ」て光を当てられました。そして弟子たちに対し、「子どもを取るに足りない者とみなすあなたがたは、自分を一端の者であるかのように考えているが、天国に入るためには、自分自身こそ取るに足りない者であることに気づかなくてはならないよ」と教えられたのです。神の前では、人と比べての自分の優劣など全く虚しいものです。必要なことは、そんな自分の弱さ、罪深さを潔く認め、神のあわれみにすがることなのです。〈自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです〉。このように天国の価値観は、優劣を競うこの世のそれとは正反対です。天国は「上下逆さまの国 (Upsidedown Kingdom)」と言われます。自分がそこに入るのにふさわしいと考えている人は決してそこに入ることはできず、逆に、自分はそこに全くふさわしくない罪深い者であることを認め、けれども神様からの贈り物としてそれを受

け入れる人だけが、そこに入ることができる国なのです。

三、子どもをイエスの名のゆえに受け入れる

続いて主イエスは、最も無価値であると大人たちが考へる子どもを、〈わたしの名のゆえに受け入れる〉ように命じておられます。もちろんその真意は、子どもだけでなく「全ての人を」です。そしてそれは〈わたしを受け入れる〉ことだと主はおっしゃるのです。「これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです」(25・40)とあるとおりです。「キリストは彼のためにも、死なれたのである」(ローマ14・15、口語訳)。この事実こそが、私たちを高ぶりの危険から遠ざけ、天国の価値観に基づいて互いに愛し合い、仕え合うことを実現させる力の源泉です。罪深い私のため、キリストは十字架で命を捨てて下さいました。その方が目の前のこの人のことも愛しておられるのです。

結論

子どもとはまさに私たち自身であり、そして目の前の隣り人です。限らない恵みによつて主に受け入れられていることを感謝しつつ、互いに愛し合い、仕え合うなら、教会は地上にあつても天国を表すものとされるのです。

研究資料

(宮澤清志)

マタイは、彼の福音書の中で、イエスのおしえ(説教)を5つの個所にまとめている(5〜7章/10章/13章/18章/24〜25章)。

この個所は、そのうちの4番目の説教である(この説教の始まりをどこにおくかは注解者によって多少の相違がある。ある注解者は第4の説教の始まりを17・24に見る)。イエスはこの個所で、ご自身が建てられた教会の倫理観を示される。教会は、単に同心の者が便宜上構成する組織ではなく、イエスによって建てられた(16・18)ものであり、「天の御国」の地上的な現れともいえる場所である。しかし、残念なことに、彼らは完全ではない。罪や弱さを持ち、プライドや不信仰の中にいる。結果、様々な問題を引き起こし、あるいは巻き込まれてしまう。そのような事態に直面したときに、神の民はどのようにふるまうべきであろうか。この個所はそのような問題に対する示唆を与える個所である。

なお、本個所は、並行記事としてマルコ9・33〜37、ルカ9・46〜48にも記載されており、当該個所にも目を

通して備えていただきたい。

テキスト

1 弟子たちが 他の並行個所との相違点の一つ。他の福音書では、弟子たちが論じ合っていたところにイエスがやってきたとされている。しかしマタイによれば、弟子たちの方からイエスに近づいて質問したとされている。天の御国では、いったいだれが一番偉いのですかこの個所も他の福音書との相違のある個所である。特にマルコでは、弟子たちの間で誰がたが一番偉いかという現在の序列についての論争であるのに対して、マタイでは弟子の間での順位ではなく「天の御国」では誰が一番偉いかという問いかけになっている。また、「だれが一番偉いか」というテーマは、この後更に20・20〜28にも繰り返される。この問いは、イエスの三度目の受難予告(20・17〜19)の後に起こっている。本日のテキストの前にも二度目の受難予告がある(17・22〜23)。このように考えると、当時の弟子たちにとっての関心事は、イエスの受難よりも優劣争いであったという弟子たちの弱さが反映されている。

2〜3 一人の子ども おそらく近くで遊んでいた小

な子であろう。向きを変えて 新改訳第三版では「悔い改めて」と訳している。これは、方向転換を指す言葉である。それまでの「誰が一番偉いか」という偉さを求めるあり方から向きを変えて、幼な子のようになることを求めたものである。具体的には次節のイエスの言葉にその真意がある。子どもたちのように 多くの注解者が、幼な子の具体的な特性を挙げている。たとえば、誰かに頼らなければ自分だけでは生きていけない、誰かの保護を必要とする、というような特性が挙げられよう。しかし、ここで最も言わんとするところは、子どもの社会的立場のゆえである。子どもは社会的立場を持たず、また自ら求めることをせず、自らの無力さを知っている存在である。権力や財力、地位とは無関係に生きる存在の代表として、イエスは子どもを取り上げたのであろう。決して天の御国に入れません イエスは弟子たちの「誰が一番偉いか」という問いから出発して、天の御国にはいるための条件という、神の民のさらに本質的な問いを弟子たちに示している。

4 この記事はマタイ独自の記事であり、マルコとルカにはこの記述はない。ここに、当初弟子たちが問うた「天

の御国では誰が一番偉いか」(1)という問いの答えがある。それは「自分を低くする人」すなわち謙遜さである。大人の世界は、年功序列、政治的手腕、経済的資本、軍事などによって格付けがなされる世界である。それに対して子どもの本質は、弱く小さい者であり、助けを必要とする存在である。低さ、謙遜さこそが、天の御国において問われることなのである。それは、ちょうどイエスがご自身のことを「へりくだっている」と語られた言葉と同じである(11・29)。

5 この節は前節までの結論であると同時に6節以降に続くものと理解できる。このような子ども一人 前節までの、大人に対する子どもではなく、イエスの弟子たちを指す。わたしの名のゆえに イエスの弟子たちは、子どものように小さくつまらない者である。しかし、彼らはイエスのもの(所有)であるがゆえに、彼ら(イエスの弟子たち)を受け入れる者はイエスご自身を受け入れる者なのである。受け入れる 引き受ける、認める、歓迎するなどの意味を持つ。

参考図書 1月28日分と同じ。

聖書

マタイ19・16〜26

タイトル

金持ちの青年の悲しみ

暗唱聖句

それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。

マタイ19・26

目標

砕かれた心でキリストを信じ、救いを受け取る者となる。

導入

(土屋開夫)

電車やバスには「優先席」というのがありますよね。ご高齢の方や体の不自由な方、またお腹に赤ちゃんがいる方などのための座席です。以前は、この優先席のことを「シルバースhirt」と言っていました。シルバーは何色の事かわかりますか？ そう、銀色です。皆さんは電車やバスで席をゆずってさしあげた事がありますか？

ところで私たちの心にも「ゴールド（金色）shirt」としても言うべき大切な優先席があります。この席は自分にとって一番大切な方に座ってもらうための席です。

富める青年

ある時、一人の青年がイエス様のところにやって来ま

した。とってもお金持ちだったそうですから、きつととても高そうな良い服を着て、金や宝石の飾りもつけて、いかにも立派そうな外見だったことでしょう。

そして、お金持ちというだけでなく、「十戒」を始めとする聖書の教えをよく守って、真面目に生きてきたようです。この青年は「お金」も、また「自信」もたっぷり持っていたのです。

みんなの中にもそんな子がいますか。「ボクは、パパやママや学校の先生からも、『良い子だね』って、よくほめられるんだ。学級委員もしてるし、テストもいつも90点以上とってるし、バイオリンも習ってる。そしてボクのパパは会社の社長なんだ…」。

どんなよいことをしたら…

この青年はイエス様に質問しました、「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか」(16)。永遠のいのちが欲しい、天国に入れる約束が欲しい…、そういう願いがあったのでしよう。そして、もしかしたら、既に90点ぐらいは取れている自信があったのかも知れません。

でもイエス様はこう言われました、「良い方はおひと

りです」(17)。本当に良い方、完全に正しい方は、本当の神様だけです。人間はどんなに良いことをしたとしても、永遠のいのちを得られるほど、また天国に入れるほど良いものになることは決して出来ません。心に自分ではどうすることもできない「罪」があるからです。

イエス様はその事に気づかせるために、こう言われました、「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい」(21)。この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去りました。この青年の心の「ゴールドシート」には、お金や財産が座っていたのです。この青年にとって、心の中で一番大事だったのは、そして頼りにしていたのは、お金や財産だったのです。それを手放すことは、彼にはまだ出来ませんでした。永遠のいのちよりも、イエス様よりも、財産の方が大事だったのです。

どうすれば永遠のいのちを得られるか

どうすれば永遠のいのちを得られるのでしょうか？ どうすれば天国に入れるのでしょうか？ それは心の「ゴールドシート」にイエス様をお迎えすることです！ その席は、王様であるイエス様だけが座るべき、イエス様の

「優先席」なのです。

今、キミの「ゴールドシート」には、何が座っていますか？ 自分ですか？ それとも大切な宝物？ もしかして、スマホ？ ゲーム？

まとめ

イエス様は言われました、「金持ちが天の御国に入るのは難しいことです」(23)。心の中に宝物をいっぱい持つてる人は、イエス様に「ゴールドシート」をゆずるのが難しいでしょう。でもイエス様は「難しい」とは言われませんが、「不可能」とは言われませんでした。その証拠に聖書では、東の博士やザアカイさん等、お金持ちの人もイエス様を受入れ、宝物をささげています。「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」(26)。

♪もうふりむかない♪ (PW18、イン86、イン新105)

聖書 マタイ19・16〜26 テーマ 金持ちの青年の悲しみ

序論

(石田高保)

人間は自分の存在している意味をさまざまな方法で確かめたいと願うものです。

一、こころ満たされない生活

ここにひとり、こころの満たされない青年がいます。彼は裕福であり、高い教育を受け、品行方正で、健康でもあり、何一つ不自由なことはないように見られています。当時、お金持ちであることは神の特別な祝福を受けていると考えられていました。けれども彼の心は満たされず、悩んだすえ有名な教師イエスに解決を求めてやってきました。(先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか、実に真面目な質問です。彼はもつと財産が欲しいとか、贅沢がしたいとか言ったわけではありません。永遠のいのちという人間にとって最も大切なものを真剣に求めているところは見事です。

それに対してイエス様は答えました。(へのちに入り

たいと思うなら戒めを守りなさい…殺してはならない。姦淫かんいんしてはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい)。これに対して青年は、(私はそれらすべてを守ってきました)。彼は自分の真面目な生き方を誇りとし、よ拠り所としています。自分が正しい生き方をすれば、それに対して神がいのちを与えてくれるものと考えているのです。裏返せば真面目に生きなければ神はいのちを与えてくれないと考えています。つまり神様との関係はギブ・アンド・テイクで、正しく生きるかどうかで自分のアイデンティティを確かめようとしているわけです。しかし心は満たされませんでした。

するとイエスは(完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります)。イエス様は誰だれに対しても全財産を投げ出さなければ、永遠のいのちを得られないと言っているわけではありません。この青年のように財産を拠り所よりどころにしている人に対してチャレンジしているのです。いや、財産だけでなく自分の誇りとするものを拠り所よりどころとしている人に対して挑戦

しています。たとえば仕事、地位、財産、健康、趣味、スタイル、容貌、自分の正しさ、何でも心の拠り所となり得ます。しかしそれらは良いものであっても、人を心から満足させることのできない偽りの避け所であって、いつか必ずしごを外されます。〈青年はこのことばを聞くと、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである〉。王より飛車を可愛がりと言われますが、自分の財産と永遠のいのちを天秤にかけたとき、財産のほうを選んでしまったわけです。さてあなたはイエス様以外に拠り所としているものがあるでしょうか。

二、こころ満たされる生活

大多数の日本人が宗教に対して距離を置くようになって理由の一つは、豊か過ぎることにあると言われます。それはみんながお金持ちになったという意味ではなく、神が必要に感じられないほど豊かになってしまったということです。たいていのことがお金さえ出せば解決する社会になっています。わざわざ神頼みする必要を感じないのです。主は「貧しい人たちは幸いです」と言われます(ルカ6・20)。当時も今も、貧しい人は自分の持ち物に頼れず、神にだけ頼ろうとするので、神に立ち返りや

すいものです。いつばう豊かな人は、神に頼らなくても自分で解決しようとしますし、たいていのことはできてしまい、意識しないで神から自分を遠ざけるので、ますます神がわからなくなります。ですから主は〈金持ちが天の御国に入るのは難しいことです〉と言われました。

では文字どおり貧しくなければ救われいいのかということではありません。「心の貧しい者は幸いです」(マタイ5・3)、多くの日本人のように豊かであっても、自分は頼りにならない、神に頼りたいという、神に対してオープンな人は救われやすいのではないのでしょうか。〈あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい〉。文字どおりの意味ではなくても、身近な人への親切でも、ボランティアでも、誰かに自分を与えるとき、心は満たされます。ですから「受けるよりも与えるほうが幸い」なのです(使徒20・35)。さて、あなたが人に自分を与えることで心満たされた体験はどんなことでしょうか。

結論

主はできないことをしろと命じられているのではありません。自分の持っている何かを人のために与えるようにチャレンジしておられます。

研究資料

(辻林和己)

この個所だけでなく他の福音書の並行記事（マルコ10・17～27、ルカ18・18～30）にも目を通し、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）による相違点にも目を向けたい。この個所の前に、主イエスが子どもたちを来させられ、御手を子どもたちの上に置かれたという記事（19・13～15）があることにも留意したい。

テキスト

16 一人の人 マタイによればこの人は「青年」である（19・22）。マルコによれば資産家（10・22）、ルカによれば「指導者」である（18・18）。新共同訳では「議員」と訳されている。ユダヤ教の指導者で高い地位にあったのであろう。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。当時の多くのユダヤ人は、律法を行うことによって救われると考えていた（ローマ9・32）。この青年は永遠のいのちを得ることができた確信を持てず、主のもとに来て尋ね求めた。なにか「良いこと」を「する」ことによってそれを得られると考え

ていた。しかし、絶対的な意味で「良い」と形容できるのは神だけである。

17 良い方はおひとりです 主イエスは、この青年の視点を神ご自身に向けようとしておられる。

18～19 戒め 出エジプト20・12～17、申命記5・16～21に記されている「十戒」の第五戒以下の対人関係についての律法。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい レビ19・18の引用。主イエスは彼に隣人との関わりを問われた。

20 私はそれらすべてを守ってきました この人には、律法をずっと守ってきたという自負があった。しかし、それら（律法）は、主が山上の説教で語られたように（マタイ5・21～48）、人の内面にまで深く関わるものであった。彼の律法に対する認識はあまりにも皮相的なものであったのである。彼とは対照的に使徒パウロは、律法とは何かを神と自分に深く問うた（ローマ3・20～24等）。21 マルコでは、「イエスは彼を見つめ、いつくしんで言われた」（10・21）とある。主は彼をいつくしまれ永遠のいのちへ招こうとされた。青年は十戒を守っていると思っていたが永遠のいのちを得ている確信はなかった。

何が足りないのかを問う青年に対し、主は、自分の持ち物を売り払い、貧しい人たちに与え、ご自身に従うことを求められた。主は「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マルコ8・34)と言われたが、求めておられるのは自我の要求を否定し、神の御旨に生きることであって、ここで主は救いの条件が善行にはないことを明らかにしておられる。

22 神と富とに仕えていた彼は、主イエスの招きに従うことはできなかった(6・24)。多くの財産や物質的なものは神との関係の妨げとなりやすいのである。悲しみながら立ち去った。このとき、彼が主のもとから立ち去らず命じられたことを実行できない自分の弱さや罪を認め、主に救いを求めているれば、主にさらに取り扱われたであろう。「議員」と「取税人」の違いはあるが、金持ちだったザアカイは悔い改めて救われている(ルカ19・1-10)。(この青年の悔い改めの可能性については、P・ウィルクス著『救霊の動力』113頁を参照。)

23 天の御国 直前の子どもの記事にあるように、自分の無力さを認め、主にすがり、主の救いを信じる者だけが入ることができる。何も持たない子どもたちと地

位も財産も名誉もある青年が対比されている。

24 らくだが針の穴を通る らくだは当時、ユダヤ地方で最大の動物とされていた。これは不可能であることを表す一種の誇張的表現。しかし、金持ちが神の国に入るよりは、…が易しい。この主の言葉に弟子たちは困惑した。

25 ユダヤでは財産を豊かに持つ者は神から祝福された者であると考えられていた。そのような者が神の国に入ることが難しいということであれば、誰が救われることができるかと弟子たちは考えたのである。

26 それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます 救いは人の力によつては獲得することではない。ただ、三位一体の神のみがなされるみわざである。主の十字架と復活による救いは神からの賜物であつて、人はそれを信じて受け取るだけである。

参考図書 内田和彦「マタイの福音書」『新実用聖書注解』、増田誉雄「マタイの福音書」『新聖書注解 新約1』(以上のちのことば社)、他

聖書

タイトル

マタイ20・20～28
仕える生き方

暗唱聖句

人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。

目標

マタイ20・28
仕える生涯を送られた御子を覚え、仕える生き方をする。

導入

(土屋開夫)

今の時期は、中学生や高校生のお兄さん、お姉さん達にとっては受験の大変な時期です。もしかしたら小学6年生の子たちの中にも、受験をしている子がいるかも知れませんね。

でも、ちょっと考えてみましょう。なぜ受験をするのでしょうか？ いい学校に入りたいから？ そしていい会社に入りたいから？ そして偉くなりたいから？

「偉い」って、どういう事でしょうね？ 今日はいエス様が「本当の偉さ」についてお話しされました。

何を求めているのか？

十二弟子の中のヤコブさんとヨハネさんは兄弟です。ある時、この二人のお母さんがイエス様のもとにひざまづいてお願いしました。簡単に言うと、「主よ、あなたが王様になられた時には、息子のヤコブを右の大臣、ヨハネを左の大臣にして下さい」とお願いしたのです。自分の子どもには、将来偉くなって欲しい、立派になって欲しい、有名になって欲しい、と思うお母さんの気持ちは今も昔もいっしょです。最近是我が子を有名タレントにしようと、赤ちゃんの時からレッスンに通わせるお母さんもいるそうです。

でもイエス様は言われました、「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。」

親なら我が子に素晴らしい人になって欲しいと願います。みんなも素晴らしい人になりたいと思うでしょう。でも「本当に素晴らしい人」また「本当に偉い人」というのは、大臣になるとか、社長になるとか、人の上に立つ立場になるという事ではありません。大臣でも大統領でも、素晴らしくない人は幾らでもあります。ウソをつく人もいます。自分の事や自分の国の事ばかり考えて、他

人の事を考えない人もいます。そんな事では、偉くも素晴らしくもありませんね。

本当に偉い人

父なる神様の目からご覧になった時、本当に偉い人、素晴らしい人とはどんな人でしょう？ イエス様は言われました、「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい」。本当に偉い人になりたいと思うなら、自分のためではなく、誰かのために仕える人、誰かのために働く人、誰かのために与える人になりなさい、という意味だと思います。

そして続いてこう言われました、「人の子が、仕えらるるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと同じようにしなさい」。

イエス様は神の御子です。言わば、神の王子様です。そのイエス様がこの世に降りてきて下さいました。それは私たち人間から仕えてもらったり、チャホヤしてもらうためでもなく、私たち人間を罪から、滅びから、地獄から救うために、自分のいのちを十字架の上で与えるた

めに来て下さったのです。あなたが救われるために、仕え、働き、いのちを与えて下さったのです。だからイエス様は一番偉い人、一番素晴らしい方です！

まとめ

あなたは将来どんな人になりたいですか？ お金をたくさん儲ける人？ 有名な歌手やスポーツ選手になる事？ それも悪くないけど、もし本当に偉い人、素晴らしい人になりたいと思うなら、どんな立場や職業についても、そこでイエス様のように、神様のため、そして人のために、仕える人、働く人、愛する人、どんなに小さなことでもいいから与えられる人になって下さいね！ そうしたら、イエス様が「偉いぞ！」とほめて下さるでしょう。

♪主は僕らを用いてくださる♪（PW59）

聖書 マタイ20・20～28 テーマ 仕える生き方

序論

(小泉 創)

組織のリーダーには、自分の能力を発揮して他のメンバーを統率するタイプ、ビジョンを掲げてメンバーに動機付けをするタイプをはじめ、さまざまなタイプがあります。聖書は私たちにどのようなものであるように教えているでしょうか。

一、人の願い

イエスはエルサレムに上る途中で、十二弟子だけに十字架の死とよみがえりについてお話になりました。それはイエスのお働きの中心であり、とても重要なことでしたが、その時の弟子たちには十分に理解できませんでした。

この話のあとで、ゼベダイのヤコブとヨハネの母が息子たちとともにイエスのところに来て言ったことにもそのことが表れています。息子たちが主イエスの御国で右と左に座れるようにお言葉を下さい、と願ったのです。

彼らはイエスの権威を認め、イエスの御国が来ることも信じていたのでしょう。そのイエスに従っていく報いとして、イエスの隣ですべての者を治める権威が与えられることを求めました。それは彼らなりにどこまでもイエスについていきます、という信仰の表れだったかもしれません。しかし彼らは報いに気を取られ、イエスが栄光の御座に着く前にどうしても通らなければならぬ道、十字架の苦しみの道についても知ろうとはしていませんでした。

ほかの十人の弟子たちは、ヤコブとヨハネの申し出を聞いて腹を立てました。彼らに抜け駆けされたと思ったからでしょう。みんな同じことを願っていたのです。私たちが願っていることは、神の願っておられることと近いでしょうか。あるいはかけ離れているでしょうか。

二、仕えるために

イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われました。「異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。あなたがたの間では、そうであってはなりません」(25、26)。弟子

たちが願っていたのは、そのようなリーダーシップのイメージだったのでしょう。しかし、イエスは「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい」(26)と教えられました。私たちが人を支配すること、人から仕えられることを喜ぶのではなく、皆に仕える者となるのが神の願いです。

イエスこそが、そのようなリーダーシップの模範となるお方でした。イエスはすべてを治められる神の子であるのに、僕の姿となってくださいました。十字架にお掛になる前日には、弟子たちひとりひとりの汚れた足を洗ってくださいました。人々からあざけられ、ののしられても仕返しをせず、とりなしの祈りをしてくださいました。十字架の上で自らのいのちを、全ての人の贖いの代価として差し出してくださいました。イエスのような生き方を、「サーバント・リーダーシップ」という言葉で語ることがあります。それは人を権力で統率するのではなく、しもべのような姿となって支え、人に仕えるリーダーシップです。「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために：来たのと、同じようにしなさい。」(28) 救世軍の働き人サムエル・ブレングルは伝道者として

の働きを始めようとした若き日に、創設者のウィリアム・ブースから、君は働き人としてやっていけないだろう、と言いつ渡されます。相当な学歴を持ち、才能あるブレングルには、かつて飲んだくれだったり、娼婦だったりした者を上司とすることは難しいだろう、と言うのです。ブレングルには彼らの靴磨きの奉仕が任せられました。しばらくして彼の心は騒ぎはじめます。受けてきた教育も、与えられた賜物も投げ捨てて靴磨きをするお前はばかものだ、と心の中にささやく声が聞こえてきたのです。落ち込んで祈る中で主は応えてくださいました。「あなたは彼らの靴を洗っているが、私は彼らの足を洗ったのだ」と。ブレングルは自分のために投資するのはなく、キリストと共に他者に仕えるために召されていることを確信したのです。

結論

私たちは、報いを求める以上に、主イエスがそうであったように、人に仕える者として整えられ、神のご支配のすばらしさを証しさせていただきましよう。

研究資料

(小平徳行)

18・11・6に引き続いての地位論争。今回はイエスがご自身のエルサレムでの受難と復活を弟子たちに予告された後のことである。彼らはその意味を理解せず、彼らの関心はもっぱら自分たちの地位にあった。

テキスト

20・21 **ゼベダイの息子たちの母** ここでは母親がイエスに願ひ出ているが、他の福音書では本人たちが願ひ出たように記されている(マルコ10・35)。

22 **あなたがたは** イエスに直接願ひ出たのは母親であったが、ここではその2人の息子である弟子たちに語りかけている。母親の嘆願の背景には、弟子たち自身の意思があった。それゆえ、イエスは母親の問題としてではなく、弟子たちの問題として対応された。分かっていません もし彼らが御国の本性を本当に理解しているなら、このような要求をするはずはないということ。わたしが飲もうとしている杯 間もなくイエスが経験される十字架の苦しみを指す。これを飲むとは、イエスのための苦しみに耐えることを意味する。「できます」と言っ

た これはイエスの言葉に反射的に答えたもので、自分たちが将来直面するであろう事態を十分予測したうえで述べたものではない。

23 わたしの杯を飲むことになります イエスは、彼の生涯を見通されて言った。実際、ヤコブは教会における最初の殉教者となり(使徒12・2)、ヨハネも晩年、厳しい迫害を受け、パトモス島に流刑となった(黙示録1・9)。わたしが許すことではありません。わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです イエスは彼ら二人の大臣席を約束されなかった。これは父なる神の主権のもとに決められることであり、イエスはご自分をあくまでも神の使命を果たすためのしもべの位置に置いておられた。

24 **ほかの十人は…腹を立てた** 二人が願ひ出したことは、他の十人の弟子たちにとっても大きな関心事であった。彼らの反応は、自分が他の人々より高い地位に就きたいという意識が全員に巢食っていた事を暴露するものであった。先にイエスは、幼な子のように自分を低くする者が御国では一番偉いと教えられたが(18・4)、弟子たちは何一つ学んでいなかった。

25 イエスは弟子たち全員の問題であるとは見抜き、改めて御国の支配原理を明らかにされる。横柄にふるまいこれは「押さえつけ」(使徒19・16)と訳されているように、権力で治めることを意味する。偉い人たちは「大きい人たち」で大きな権力をもっている人々、高い地位にある人々を指す。権力をふるっています「権力をほしいままにする、暴政をしく」の意。

26 仕える者(ギ)ディアコノス 主人とその家族のために食卓で給仕する人のこと。イエスはこの言葉を一般的な意味に広げられ、主人の意向をくみながら忠実に働く人という意味で使われた。偉くなりたい 前節の「偉い人たち」と同じ語根。

27 先頭に立ちたい これは「第一になる」の意で、前節の「偉くなる」よりはるかに強い内容を指す。しもべ(ギ)ドゥーロス 字義訳は「奴隸」であり、これも前節の「仕える者」よりも強い表現である。本節は前節より強い表現を用いて、より深く謙遜になるようにとの思いが込められている。

28 ここまでイエスは弟子たちにどのような生き方をすべきかを教えてこられた。本節はそのクライマックス

で、メシアとしての自らの到来の意味と目的を示すことにより、弟子たちが見習うべき模範を示された。仕えるため イエスの生活はまさに仕える歩みであった。イザヤ40・55章では「苦難のしもべ」の到来を預言している。そのしもべとはイエスご自身に他ならなかった。この奴隸の姿は十字架にかけられる前夜、最後の晩餐の席上で、手ぬぐいを取って、弟子たち一人一人の足を洗われたこと(ヨハネ13・4・5)に象徴され、その極限の姿は十字架の死により、ご自分の命を与えられたことによつて表された。贖いの代価(ギ)リュトロン 戦争の捕虜を釈放したり、奴隸を自由にする時に、それまでの所有者に対価として支払われたお金を指す。聖書協会共同訳では「身代金」。いのち(ギ)プシュケー これは生物学上の生命を意味するものとは異なり、肉体的、人格的なものすべてを含む言葉である。すべての人の贖いは、イエスの全存在が差し出されて完成したのである。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解(下)』、増田誉雄『マタイの福音書』『新聖書注解・新約1』(以上いのちのことば社)、他

聖書

マタイ21・1～11

タイトル

王であるイエス様を心に迎えよう！

暗唱聖句

見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。

マタイ21・5

目標

柔和な王として来られたキリストを受け入れ、従う者となる。

導入

(飯田勝彦)

2月14日からイエス様の苦しみを覚えて祈るレントに入っています。皆さん学校や宿題、塾などで忙しいと思いますが、少しでもイエス様のことを覚えて祈りましょう。皆さんのお母さんは、苦しい思いしながら皆さんを産んでくれました。今、皆さんがこうして過ごせているのはお母さんの苦しみがあつてこそ、です。

それと同じようにイエス様も皆さんが幸せに過ごせるように苦しい道を行んでくださいました。

エルサレムへ入城されるイエス様

今日の箇所は、イエス様がろばに乗ってエルサレムへ入城されたことが書かれてあります。エルサレムはキリ

スト教の聖地です。今でも多くの人が観光でエルサレムへ訪れています。イエス様も観光だったのでしょうか？いいえ、違います。イエス様にとってエルサレムは決してワクワクするような場所ではありませんでした。なぜなら、イエス様はエルサレムで多くの人から苦しめられ、十字架につけられて殺されることを知っておられたからです。

今日の聖書箇所の前にはイエス様ご自分で、エルサレムで苦しめられて殺されることを話しておられます。では、どうしてイエス様は殺されてしまうようなエルサレムへ行かれたのでしょうか。それは、私たちに救いを与えるためです。

イエス様は私たちが救われるために、エルサレムへ行くことから逃げないで顔をしっかりとエルサレムへ向けて進んで行かれました。

み言葉を成就されるイエス様

イエス様はろばに乗ってエルサレムへ入城されましたが、それは約700年前の預言者イザヤなどによって語られていたことでした。しかも、ろばに乗るといふ具体的なことまで預言されていたのです。イエス様によってこ

の預言は成就しました。

イエス様の人生は、旧約聖書に語られたみ言葉の成就でした。それは、神の壮大なご計画、私たちが救われるための計画を実現するためにイエス様は来られたからです。イエス様はこの地上で自分のやりたいことをされたのではなく、神さまのみ言葉が成就することだけを喜びとして歩まれました。そこには多くの戦いと苦しみがあったのです。それはすべて私たちが救われるためでした。

王として迎えられるイエス様

イエス様は、全人類を救う王としてこの地上に来られました。皆さんはアメリカの大統領が日本に来たときの映像を見たことがあるでしょうか。移動のときには頑丈でしかも高級な車に乗り、周りには多くの警備車両がついています。まさにVIP（ベリー・インポートアント・パーソン＝重要人物）対応です。

しかし、王であるイエス様はどうでしょうか。イエス様が乗られたのは高級車ですか？ いいえ、子ろばです。他の聖書箇所を見るとその子ろばは「まだだれも乗ったことのない子ろば」（マルコ11・2）と記されています。

イエス様はそのような頼りにならない子ろばに乗られるほどまでに謙遜で、柔和な王としてエルサレムへ入城されました。人々は「ホサナ！（どうぞ救ってください）」と叫び、イエス様を歓迎しました。しかし、後で彼らはイエス様に対して「十字架につけろ！」と叫び、イエス様の処刑に賛成したのです。それは、彼らがイエス様をこの世の王と同じように考えていたので、強い王ではなく捕らえられ、鞭うたれるイエス様の姿につまずいてしまったのです。

まとめ

皆さんは、イエス様をどのような王として迎えていますか？ イエス様は、神であられるのに人となられ私たちに仕えるほどまでに柔和なお方です。

イエス様を心に迎えるとき、私たちの心の中で柔和なイエス様が王となってくださいます。このイエス様を迎えるなら、争いではなく、平和をつくりだす者に変えて下さいます。柔和な王であられるイエス様を救い主として心に迎えましょう。

♪さあ イエスさまを信じましょう♪（ホ60、ふ1）

聖書 マタイ21・1～11 テーマ エルサレム入城

序論

(小泉 創)

ウルグアイのムヒカ元大統領は、「世界で最も貧しい大統領」と呼ばれました。一国の大統領でありながら、古い車に乗り、小さな家に住む、清貧を重んじる素朴なライフスタイルが話題になりました。

イエス・キリストは、十字架を前にエルサレムに入場なさるとき、子ろばに乘られました。それは一般的に想像する王の姿とは全く異なっていました。しかし子ろばに乘られたイエス・キリストの姿は、単なる清貧のあらわれではありませんでした。

一、ろばに乗る王

主が弟子たちに、近くの村からろばを連れてくるようにとお命じになったのは、馬が見当たらなかったからではないでしょう。つながれた親ろばと子ろばをご存じの主でしたら、必要とあれば馬のいる場所を示すことも出来たはずですが。それでも主はろばを、それも親ろばでは

なく、あえて子ろばの方を望まれて、その背中に乘られたのです。

それはマタイが引用したゼカリヤ9・9にある来たるべき王、救い主の姿と重なります。その王は柔和で、ろばの子に乘られるお方です。ゼカリヤ書の続きは、「わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる」とあります。戦いに結び付いた強い馬ではなく、荷を運んだり、農作業に用いられ、ゆったりと進むろばに乘られる王。好戦的で敵をけちらして力で服従させる王ではなく、イエスは平和をつくられる王であることを明らかにしているのです。

二、王を迎える人々

おりしも過越の祭りが近づく中で、神の都エルサレムは大きな盛り上がりを見せました。子ろばに乗ってエルサレムに入城なさるイエスを人々は熱狂的に歓迎しました。王を迎えるときのように(Ⅱ列王9・13)、着ていた上着を脱いで道に敷き、その上を主に通っていただいたのです。そして「ダビデの子にホサナ(お救いください、栄光あれ)！」と、喜びの声をあげました。

詩篇118・25～26からの引用のことを叫ぶ人々には、救い主を通して、神が与えてくださる輝かしい勝利のわざが想像されていたことでしょう。待ちに待った王が来られた！ いよいよ私たちの願いが実現する！ 現実的な目の前の敵が滅ぼされ、安寧が与えられるのだ、と。

三、王の戦い

人々はモーセを通してなされた救いのわざに思いをはせ、今新たに神がしてくださることへの期待がふくらんでいたのです。モーセがかつて約束した「私のような一人の預言者」(申命記18・15)がついに目の前にあらわれたのです。それならば、彼らはその言葉に聞き従わなければなりませんでした。しかし実際はどうだったでしょうか。

主がなさそうとしておられる救いは人々の期待を上回るものでした。主は人々が望むようなローマや圧政からのユダヤの救いではなく、悪魔の支配、罪と死のおそれに縛り付けられて閉じ込められている全ての人を救い出すために来られたのです。

入城の際に喜んだ群衆の期待通りには、イエスはふる

まいませんでした。ですから人々の期待は失望に変わり、反対する者たちの扇動的なねたみと憎しみの声に巻き込まれていきました。その週末に神の都は、待ち望んでいた王を十字架につけよとの声で満たされました。従うべき王を退け、ついには十字架につけて殺してしまっただのです。

しかし実はそのような罪びとたちのために、柔和な王はすべてを手放し、十字架におかかり下さったのです。十字架の死からの復活によって神は勝利をおさめられました。そのように、どのような王もなしえない素晴らしい勝利が、すべての人の罪のゆるしと、救いの道を開いたのです。

結論

神のなされることは、私たちの期待を越えた素晴らしきことです。誰よりも柔和で、父なる神に従順に歩まれた主に、私たちも従っていきましょう。

研究資料

(辻林和己)

マタイの福音書では21章から主イエスのご生涯の最後の一週間が始まる。1～17節は「棕櫚の聖日」と言われる日曜日の出来事が記されている。今回の個所は「エルサレム入城」と呼ばれる個所である。この出来事は他の三福音書にも記されている(マルコ11・1～11、ルカ19・28～48、ヨハネ12・12～19)。

テキスト

1 **ベテパゲ** 「いちじくの家」の意。エルサレムの東方、オリーブ山のふもとにあった村。

2 **向こうの村** 「ベタニア」のことだと言われている。ろばがつながれていて、…気がつくでしょう 主イエスが全知のお方であることを示している。

3 **主がお入り用なのです** ろばの主人より主イエスの方が真の意味でその所有者であることを表している。

4 **預言者** イザヤとゼカリヤのこと。

5 **娘シオンに言え** この個所だけはイザヤ62・11の引用。「娘シオン」はエルサレムの住民のこと。見よ、…以

下はゼカリヤ9・9の引用。ゼカリヤ書の「義なる者で、勝利を得」の個所は省かれている。あなたの王があなたのところに来る 真の王である救い主がエルサレムに来られる。柔和な方 マタイ11・29参照。荷ろばの子である、ろば。これが「荷ろばの子である、…」に換えられている。救い主は、柔和なお方であり、軍馬や戦車ではなく、平和の王として子ろばに乗って来られる謙遜な方であることを著者マタイは強調している。マタイはゼカリヤ書を引用することによって、主イエスが、旧約聖書で預言された通りの救い主として来られたことを示している。

7 **ろばと子ろば** ろば(おそらく母ろば)と一緒に連れて来られたのは、まだ小さい子ろばが群衆の中を落ちていて進むのに必要だったからかもしれない。

8 **非常に多くの群衆** 原文では「群衆(ギ)オクロス」の前に「多数の」の意味を持つ形容詞の最上級「ギ)プレイストス」が用いられている。それによってマタイはこのときの群衆の多さを強調している。上着を道に敷いたこれは王を迎えることを意味した(Ⅱ列王9・13参照)。群衆は主イエスがエリコで盲人の目を開かれたり(マタ

イ20・29・34)、ベタニアでラザロを蘇生させられたこと(ヨハネ12・17・18)を見聞きしていた。彼らは主イエスを王として認めたのである。木の枝 ヨハネ12・13では「なつめ椰子の枝」。

9 ホサナ、ダビデの子に… 括弧内は詩篇118・25・26の引用。過越の祭りに集う人々は、この詩篇の個所を交唱しながら進んだ。「ホサナ」はアラム語で「私たちをお救いください」という意味。ここでは喜びや賛美の叫びとなっている。新約時代には「栄光あれ、祝福あれ」という意味で用いられている。主の御名によって来られる方「来られる方」はマタイ11・3の「おいでになるはずの方」の原語と同じ言葉(ギリホ・エルコメノス)が用いられている。ここでは、救い主(メシア)の称号のように用いられている。いと高き所に「天におられる神に」の意。

10 都中が大騒ぎになり 主イエスのエルサレム入城は、都中の人々に、驚き、不安、期待、疑惑、怒り等様々な感情を引き起こした。

11 この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ 人々の質問に、今まで賛美の声を上げていた群衆がこの

ように答えた。「預言者(ギリホ・プロフェーテス)」は「(旧約)聖書に記されていて、あなたがたも知っているあの預言者」という意味が込められている。そしてモーセが言った「私のような一人の預言者」(申命記18・15)はこれのお方(主イエス)である、という意味を込めて語っていると理解することもできる。「ガリラヤのナザレから出た」という表現には、ガリラヤから来た群衆(巡礼者)が誇らしげに、主イエスが自分たちの地方の出身だと言っている様子が伺われる。

真の王、平和の主としてエルサレムに入城された主イエスは、救い主を待ち望んでいたユダヤの民だけでなく、十字架と復活の後、聖霊によって私のものにも来て下さった。山室軍平は、「イエスは霊魂(たましい)の世界の王である」と言っている(『マタイ伝』『民衆の聖書』)。

参考図書 増田誉雄「マタイの福音書」『新聖書注解』(いのちのことば社)、内田和彦「マタイの福音書」『新実用聖書注解』(いのちのことば社) 他

聖書

マタイ22・34〜40

タイトル
暗唱聖句

神様を愛し、隣人を愛しましょう。

あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、

知性を尽くして、あなたの神、主を愛し

なさい。

マタイ22・37

目標

一番大切なこととして、神を愛し、隣人を愛する生き方をする。

導入

(飯田勝彦)

今、皆さんが住んでいる家は木造ですか？ 国の重要

文化財などに立派な木造の建物があります。木造の家には、

沢山の柱がありますが、その中で一番大切な柱を何

というか知っていますか？ それは「大黒柱」です。大

黒柱は、建物を支えるとても大事な柱です。それが倒れ

ると、建物全体が崩れてしまうほどです。

律法学者たちがイエス様に「先生、律法の中でどの戒

めが一番重要ですか。」と尋ねました。するとイエス様

が答えられました。

全力で神様を愛するということです

イエス様は大切な第一の戒めは「あなたは心を尽くし、

いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」であると言われました。一言でいうと「全力で神様を愛しなさい」ということです。では、具体的に言うとうどんなことでしょうか。考えてみましょう。

例えば皆さんは、学校の体育の授業で50メートルを走ったことがあるでしょう。先のゴールをしっかりと見つけて全力で手を振り、足を上げてゴールするまで力いっぱい走り続けるでしょう。そのような感じで神様を愛することを、神様はあなたに願っておられるのです。神様は、あなたがどこにいても、何をやっていても、どのような時でも神様を愛することを望んでいます。

それほどまで、神様はあなたと愛し合う関係を求めておられるのです。神様が私たち人間をお造りになった目的は、互いに愛し合うためでした。私たちは、神様から愛される体験をして初めて心が安らかになります。そして、私たちも神様を全力で愛して初めて幸せになれるのです。

実は、私たちが神様を全力で愛する前から、神様の方が私たちを全力で愛してくださいました。神様は全力の愛を言葉だけで終わりにされませんでした。全力の愛

3月

3日 礼拝メッセージ例

で、行動をもって示してくださいなのです。それがイエス・キリストの十字架です。神様は、罪の中で苦しむ私たちを、助けたいと願われました。そして、愛する御子イエス・キリストを十字架にかけて死に渡されたのです。聖書に「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)とあります。

神様の全力の愛を体験した人は、神様を全力で愛する人に変えられます。神様はあなたの全力の愛を喜んで受け入れてくださいます。

自分を愛するように隣人を愛することです

イエス様は続けて「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」と言われました。これも第一の戒めと同じように大切なことでした。隣人とは誰のことでしょうか？ 家族や友だち、学校の先生、地域の人たちです。皆さんは互いに憎み合い、傷つけ合うことより愛し合うことを願うでしょう。隣人を愛するには、まず自分を愛することが欠かせません。人を赦(ゆる)せず憎んだり、相手を批判したりすることは、相手を傷つけるだけでなく、

実は自分も傷つけることになります。それは、決して自分を愛していることにはなりません。自分を愛せない人と、隣人を愛することが難しいのです。ですから、まず私たちを愛してやまない神様の愛を頂くことが必要です。神様の愛が分かると自分を愛することができるようです。そして、その愛が隣人に流れて行くのです。

隣人を愛する人は、隣人の幸せを祈ります。祈っていると不思議ですが、神様が隣人に積極的に関わっていく力を与えてくださいます。皆さんの周りには、寂しい思いをしている人や、愛されたいと思っている人がたくさんいます。神様は、あなたを用いて神様の素晴らしい愛を届けようとしておられます。

まとめ

イエス様が言われた大切な戒めを守るなら、神様が喜ばれるだけではなく、私たちも喜びと幸せに満たされます。神様を愛し、自分を愛し、隣人を愛する恵みを体験しながら生活しましょう。

♪あいをください♪(ホ78、イン67、イン新80)

聖書 マタイ22・34〜40 テーマ 一番大切な戒め

序論

(石田高保)

律法とは、十戒を土台とする旧約の律法のことです。十戒とは神の恵みに応答して、神を愛することです。その中でどれが一番大切かと聞かれて、主は二つの戒めを挙げています。それは神を愛することと、人を愛することと、二つあるようですが、実際はコインの表と裏のようにに一体です。神を愛するとは人を愛することであり、人を愛することによって神を愛する熱量が計られます。十戒を見ると、前半は神への忠誠を規定したもので、いわば神を愛すること。後半は人への態度で、いわば人を愛することになっています。ですからキリスト教とは、クリスチャンの信仰生活とは「神と人とを愛する道」と言えるでしょう。

一、神を愛すること

そもそも神に愛されていることが身に浸みてこそ、神を愛することができるといふものです。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し」てくださってい

ます。(イヨハネ4・10)。私たちはほんらい神を愛する愛を持ち合わせてはいません。それは原罪を受け継いでいるために、神を愛する能力が欠落しているからです。それどころか生まれながらの人間は神への反抗心を秘めています。ですから自分を愛してお造りになった神を愛するどころか、神を認めず、度外視しています。とても「神よ、あなたを愛します」などと言えないでしょう。神が私たちを愛して下さったとは、「私たちの罪のために、宥めなだのささげ物としての御子を遣わされました」(イヨハネ4・10)、から神を愛する心が芽生えるのです。

二、人を愛すること

人を愛することは、神を愛することと密着していて切り離せません。これは神を愛することから生まれます。「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです」(イヨハネ4・19)。私たちがほんらい神を愛する愛を持ち合わせていないのと同様に、身近な人を愛する神由来の愛も持ち合わせていません。人間の愛は、相手が可愛いから、愛すべきだから、自分によくしてくれるから、また良くして貰もらいたいから愛するといふ動機が潜んでいるものです。どんなに努力しても、人

間の愛には限界があります。

そのような人間ですが、主の十字架をとおして神から愛されていることがわかると、神を愛するようにになり、今度は隣人を愛したいと願うように変えられます。それでも愛せない人を愛して行くためには神の恵みが必要になります。愛すべき人でも自分の敵に回って愛しにくくなることもあります。それでも愛して行くためには、十字架で自己中心性を砕いていただき、聖霊に満たしていただいて、神の愛を注いでいただくことでしよう。上がったり下がったりしながら、敵を愛し、迫害する者のために祈れるようになります。

これは神を愛していることを裏づけることになります。〈あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい〉とは具体的にどういうことでしようか。まず家族、親戚、友人、知人、職場の人、地域の人、祝福を祈ること。身近な関係、難しい関係の人のためにこそ、祝福を祈るくらいはできるでしょう。その人に自分から交わりを求めましょう。そしてその人の必要がみえたらそれに応えます。話を聞いてあげる、困っているときに助ける、悲しんでいるときに寄り添う、など。〈自分自身のように愛〉

することは黄金律につながります。「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」(マタイ7・12)。その上で福音を伝えましょう。チャンスをつらえて自分の体験談を話したり、イエスさまの素晴らしさをそれとなく話すのもよいでしょう。ふだんの地道な仕える働きが人の心を開き、救いに導かれやすくなります。隣り人(身近に接する人)を愛することが、自然と伝道につながるものです。その隣り人は伝道の対象ではなく、愛の対象です。初めに隣人愛ありきです。

結論

神と人とを愛する道、それは「そのような立派な生き方はできません」と告白することから始まります。頭で理解したからといって、それができるわけではありません。事実この律法学者は「あなたは神の国から遠くない」(マルコ12・34)つまり救いに到達していませんでした。主はこう言おうとしておられるのしょう。「あなたに足りないことがある、もう一步踏み出しなさい。それは私を信頼し、身を任せて、従うことだ」と。聖霊に満たされて神の愛を注いでいただき、あなたの隣人の祝福を祈りましょう。その人に仕えてその必要に応えましょう。

研究資料

(小平徳行)

この箇所は受難週の火曜日、神殿において、イエスとユダヤ人の宗教的指導者たちとのあいだで繰り広げられた論争(21・23～23・39)の一つである。

テキスト

34 このイエスの教えはパリサイ人、サドカイ人との一連の論争の中でなされたものである。黙らせた(ギ)エビモーセン) 言うべき言葉を失い、何を話してよいかわからなくなった状態を言う。

35 イエスを試そうとして 律法の専門家がこのような質問をしたのは、真理を追究するためではなく、イエスの評判を落とすためであった。イエスがある戒めを軽視しているように見えたため、この点を問い詰めることによつて、イエスを非難できると考えたのである。

36 律法の中で これは十戒に限定せず、モーセ律法全体を指したものである。ユダヤ教のラビたちはモーセの律法を細分化し、成すべき命令が248、禁止命令が365、合計613の戒めがあると教えていた。そのすべての命令の中でどれが一番大切なかと尋ねた。これは学問的にも実

際的にも重要な問いであった。どの戒めが一番重要ですか これは直訳すると「どれが大きな戒めですか」となる。「大きな」を意味する(ギ)メガレーは、程度、階級について用いられる時、最上級の意を表わし、「一番重要ですか」という意味になる。

37～38 『心を尽くし、…あなたの神、主を愛しなさい』これは申命記6・5の引用で、「シエマ(聞け)」と呼ばれており、ユダヤ人が礼拝のたびに唱えるもので、一日に数回は復唱することを義務付けられている。心を尽くし「あなたの心全体で」の意。「いのち」は「たましい」という意味もある。ここでは、心、たましい、知性を含む、人間の全存在について言及している。愛しなさい(ギ)アガペーセイス) これは神の愛に使われる。無償で自らをささげる愛である。神を崇めることを何より先にし、神の聖なる意志に服することを何より大事にすることである。神を愛するとは、その戒めに従うこと。しかもそれは義務感によつてではなく、神を喜ばせたい一心であるものであるから、難しいものではない(イヨハネ5・3)。シエマは唯一の神に対する全面的、全人格的愛を教えている。これはユダヤ人であれば最も大切な教え

として幼い時から唱え続けてきたものであるため、イエスの答えを否定する者はいなかった。

39 第二の戒めも、それと同じように重要です 律法学者が尋ねたのは一番大切な戒めについてのみであったが、イエスは第二の戒めも同等に重要である事を述べた。神に対する態度と人に対する態度は切り離すことはできない。イエスはこの第二の戒めを守らない限り、第一の戒めを守っていることにはならないと考えておられた（イヨハネ4・20～21参照）。パリサイ人たちは神に対して熱心であると自負し、自分たちだけで分離派として一派を構え、権力者に対しては野党的存在となり、一般大衆に対しては、彼らを「アム・ハーアールツ（土民、無学の衆）」と呼んで見下げていた。シエマによって自分たちを正当化しているパリサイ人たちに向かってイエスは、隣人を愛することも同様に重要であると言われたのである。『**あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい**』これはレビ19・18の引用である。あなたの隣人旧約においては仲間のイスラエル人やイスラエルの地に寄留している外国人を指している（レビ19・18）。しかしイエスはこれを「あなたを必要としている人」（ルカ10・

29～37）、「あなたに敵対している人」（マタイ5・43～44）にまで広げ、どのような人も隣人から排除されなかった。**自分自身のように愛しなさい** 自分を愛することを当然のこととしている。「愛しなさい」は37節同様、神の愛を表現する時に使う言葉が用いられている。愛は神の本性である。

40 律法と預言者の全体 これは旧約聖書全体のこと。イエスはこの二つの戒めの中に神の全ての律法が含まれると見なされた。そしてこの愛に生きることこそが、律法主義からの解放であり、律法の完成といえるのである。イエスはこのことを他のところでも教え（マタイ7・12）、パウロも同様に教えている（ローマ13・8～10、ガラテヤ5・14）。さらには、愛がなければ何の役にも立たないと教えており、愛を追い求めよと命じている（イコリント13・1～14・1）。

クリスチャンの生涯は、キリストの愛に応答し、内住のキリストにより、愛を動機として歩み、愛に成長し、愛に完成されていくものである。これがキリストに似た者とされることであり、真のホーリネスである。

参考図書 2月18日分と同じ。

聖書

マタイ26・26～29

タイトル

契約の血

暗唱聖句

これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。

マタイ26・28

目標

契約の血として流されたキリストの血を覚え、罪のゆるしを受け取る。

導入

(今田雅子)

ある日のこと、K男君のお父さんが「K男、来週の土曜日、会社が休みだから、どこかに行くか?」と言いました。「ヤッター」。K男君は飛び上がって喜び、「お父さん約束だよ、絶対に約束だからね!」。明日はいよいよ約束の日、会社から帰って来たお父さんが「K男、ゴメン! 明日会社に行かないと駄目になったんだ。何人も病気で休んで、お父さんが行かないと、仕事が止まってしまうんだ。」「えー、約束したのに!」。K男君はガツカリ。皆さんは誰かと約束して守れなかったことって無いか? 約束を守るってとても大切だよ。イエス様は、私たちに約束よりもっと重く「契約」をしてくだ

さいました。

あなたのために裂かれたイエス様の身体

皆さんは、聖餐式^{せいさんしき}って知ってますか? 見たことあるかな? ここにいるお友だちの中には、聖餐式に出て聖餐の恵みを受けてる人もいます。今日の聖書は、聖餐式のときに読まれる御言葉です。聖餐式はイエス様が最初に行われ、私たちにこのようにするんだよ、と決められたものなのです。教会は、そのときからずっと、この聖餐式を大切に守ってその恵みを受けてきました。

最初の聖餐式が行われたとき、弟子のユダは、イエス様を殺す計画をしていた祭司長たちからお金を貰^{もら}っていました。イエス様も自分が十字架に架けられることをハッキリわかっておられたときだったのです。もうすぐ自分が死ぬことを知りながらパンを取って「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」と言われ、パンを裂き、ちぎって弟子たちに配られたのです。イエス様は、私たちを罪から救うために、鞭^{むち}で打たれ手足には釘を打たれて十字架につけられました。凄く痛かったでしょう。イエス様は、ご自分の身体を裂くことで私たちを罪から救ってくださったのです。私たちはイエス様の裂か

れた身体で、暗闇から光へ、滅んでしまおうとこれから永遠に移されます。イエス様は「わたしがいのちのパンです。」(ヨハネ6・35)と言われました。聖餐式のパンは、イエス様が裂かれた身体を表しています。私たちはこのパンをいただく、食べることで、イエス様が罪から救い出してくださったことを感謝し、イエス様が「私の内、中におられ、イエス様と一つだ」ということを体験するのです。

あなたのために流されたイエス様の血潮

イエス様は杯を取られ、「みな、この杯から飲みなさい。これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。」と言われました。聖餐式のぶどう酒(ジュース)は、イエス様が私たちのために流してくださった血を表しています。聖書に「血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」(ヘブル9・22)とあります。旧約の時代、自分の罪を赦してもらうために、神様が決められた動物をいけにえとして持っていきましました。その動物の頭の手をおき自分の罪を背負わせます。その動物が血を流して死ぬことで、いけにえを持つていった人の罪は赦されたのです。でも、動物の血は完全に私たち人間の罪を取り去ることはできなかったのです。

神様は、「自分の罪を取り去ってほしい。何とかしてほしい」と思い悩んでいる私たちを、心の奥底まで完全に罪を赦してきよめるために、イエス様を送ってくださったのです。イエス様は、私たちを罪から自由にするため、いけにえとして神様に捧げられたのです。「イエス様が流してくださった血は、私の罪のためでした」と信じて告白するなら、イエス様は私たちの罪を全部赦してきよめてくださるのです。

人の約束は破られることもあるけど、「わたしの契約の血」と言われるイエス様の契約は、「絶対に変わりません!」イエス様が流された契約の血を心の中に受け入れるとき、皆さんは永遠にイエス様の赦しときよさをいただくことができます。私たちの心を苦しめるのは罪です。でも、イエス様の契約の血によって、「罪赦された」、「罪赦されてる」と信じて疑わないうで歩めたら、最高だね。

まとめ

皆さん! イエス様はあなたを契約の中に「おいで!」と呼んでおられます。イエス様の契約の血を受け取って、罪赦された最高の喜びの中を歩んでいきましょう。
♪ゆるすためです♪(ホ58、イン新33)

聖書 マタイ26・26～29 テーマ 契約の血

序論

(石田高保)

よく知られた名場面です。いわゆる過越の食事の最中、イエス様はこんにちに続く「主の聖餐」を定められました。主は出エジプトを記念する過越の食事から、種入れぬパンとぶどう酒を取り上げて、「わたしを覚えて、これを行いなさい」(Ⅰコリント11・24)とクリスチャンのコミュニティー(教会)が繰り返し行うように命じられました。それとおして「わたしの契約の血です」と言われたキリストとの新しい契約を確認するためです。ではその内容は何でしょうか。

一、神のいのちにあずかる契約

主はひとつのパンを手にとって祝福して裂き、弟子たちに与えて言われます、「これはわたしのからだです」と。これには伏線があります。五千人の給食のあと、「わたしは、天から下って来た生けるパンです…わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です」(ヨハネ6・51)、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、

永遠のいのちを持っています」(同6・54)。つまり主はご自分の肉と血を食べて生きるようにと私たちを招いておられます。人間はもともと、言うならば神を食料とし、あるいは燃料として生きるように設計されています。ここで言う肉と血は、もちろん文字どおりではなく、イエス様との生き生きとした関係のことです。教会はキリストのからだですから、私たちが意識しなくてもイエス様とつながっています。その上でその肉を食べ、血を飲む、つまり意識的に主につながり続けるといふ信仰の営みを、聖餐は助けるのです。「主は私のうちにおられる」と告白するだけではなく、聖別されたパンを食べ、ぶどう酒を飲むことによって、知性だけでなく視覚や触覚、味覚によっても主の臨在を確認できるわけです。イエス様は見る、さわる、食べる、飲むという感覚的な営みによっても信仰を働かせられるように備えて下さいました。それは洗礼も同様ですが、身体的行為によっても神はご自分の命を私たちに注いでくださいます。神は霊的行為のために、パンやぶどう酒といった物質を用いなくさいです。そして聖餐によって私たちはイエス様と合一し、一体であることを理屈抜きで体感することができます。聖餐は

教会に一致をもちます。教会の仲間と神の家族意識、キリストのからだ意識を共有することができます。そこから聖霊によって互いに仕え合い、与えあい、支え合うという愛のわざに立ち上ることができるのです。

二、神の赦しにあずかる契約

〈これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です〉と言われていているからといって、聖餐のぶどう酒が主の血そのものではありません。しかし主がこのぶどう酒はわたしの血であると宣言しておられる以上、それを信仰によってキリストの血として飲むとき、私たちの内には聖霊によって神の恵みのわざが起こされます。それは罪の赦しかもしれない、自我の死の確信かもしれない、いやしのわざかもしれない、栄光の望みかもしれない。とにかく儀式以上のことが起きると期待すべきです。また聖餐に同席している求道者の内にも、主の臨在が明らかにすることを信じましょう。

では契約の血とはどういう意味でしょうか。それは神がイスラエルと結ばれた古い契約に代わって、イエス様ご自分のからだ（教会）と結ぼうとする新しい契約のことです。それは十字架で流された血によって完成され

ました。「ささげ物といけにえが献げられますが、それらは礼拝する人の良心を完全にすることができません」（ヘブル9・9）とあるとおり、旧約時代の動物犠牲による罪の贖いは、結局、良心のとがめを取り除くことはできませんでした。しかし「その血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ」（同9・14）とあるように、主が十字架で流された血は、二度と蒸し返されることがないほど完全に罪を取り除くことができるようになりました。そのいけにえの違いを顕著に証しているのがバプテスマのヨハネです。彼はイエス様を指さして「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」（ヨハネ1・29）と言い当て、イエスこそ究極のいけにえであり、贖いを完成する方であると看破しました。ですから私たちが聖餐に与るあずかることによって、キリストの血による新しい契約を確認し、信仰を新たにすることができるようになります。いわば新しい契約に押された実印は、イエス様の血です。

結論

聖餐は洗礼と共に「見える神の言葉」と言われ、神の命と真理を理屈抜きでわからせるために定められたものです。これに与る機会を意義深く用いましょう。

研究資料

(小平徳行)

最後の晩餐と言われる、過越の食事の場面である。イエスは十字架への受難の道を歩まれる。ここで聖餐の制定がなされた。イエスはパンとぶどう酒を弟子たちに配られ、それに新しい意味を付与された。パンは十字架上で裂かれるイエス自身のからだ、ぶどう酒は、十字架上で流される血を表す。イエス以降の代々の教会は、この食事を主の聖餐式として守り続けている。

テキスト

26 一同が食事をしているとき これは過越の食事である。イエスはパンを取り このパンは過越の食事の種なしパンである(出エジプト12・15、13・3、7、申命記16・3)。パウロは教会から古いパン種を取り除くようにと警告しており、パン種を「誇り、悪意、邪悪」を象徴するものとして言及している(1コリント5・6～8)。なお、聖餐式においては東方教会では常に、西方教会でも798年までは種なしパンにこだわることはなかった。神をほめたたえて 口語訳、聖書協会共同訳では「祝福して」。これは食事の時にささげられる定型的な祝福の祈

りのことかもしれない。新共同訳聖書では「賛美の祈りを唱えて」となっている。これを裂き イエスが一つのパンを裂かれたことを強調している。取って食べなさい 弟子の一人一人が主体的に、この主の晩餐に深く関わることを示唆している。パンを備えられるのはイエスである。しかし、このイエスの契約が、私たちに真に有効なものになるには、一人一人が自らの意思に基づいて、パンを取る必要がある。イスラエルの民は、それぞれが出エジプトを経験する者として過越の食事にあずかった。それと同様に、御国の民の一人一人は、イエスによる罪の贖いにあずかる者としてパンを取るのである。これはわたしのからだです 裂かれたパンはイエスのからだを象徴し、十字架の死を表わしている。この句は教会史上激しく論争されてきた。パンはキリストのからだそのものである、キリストはパンとともにおられる、パンはキリストの象徴である、パンはキリストを記念するものである、など様々な解釈がある。本来、聖餐は教会の一致を表すシンボルとなるはずのものであるが、神学の論争課題になってしまっている。

27 杯を取り 通常、杯は「苦悩、死、裁き」などを象

徴する。ここで単数形が用いられているのは、弟子たちがイエスの契約にあずかる一つの共同体であることを示唆している。**感謝の祈りをささげ** 前節の「祝福して」とほぼ同義。超越の食事の際に唱えられた公式の感謝の祈りを指すと考えられる。**みな、この杯から飲みなさい** イエスはご自分の弟子たちに対し、みな同じ杯から飲むように命じた。この杯にあずかることは、イエスの共同体の一員であることを示す。

28 わたしの契約の血 イエスご自身が契約を締結させるために流された血という意味。主なる神がイスラエルと結ばれた古い契約は、民が神の命令に従わなかったために破棄されてしまったゆえ、神は預言者エレミヤを通して、やがて神はイスラエルの民と新しい契約を結ぶと語られた(エレミヤ31・31～34)。この預言の成就として、イエスは御国の民と新しい契約をご自身の血によって結ばれたのである(ヘブル8・6～13)。この新しい契約において、主の聖餐が超越の食事につけて代えられたのである。**罪の赦しのために** イエスはご自身の血が罪を赦すために流されるものと解説された。罪の赦しのために血が流されることが必要であることはモーセ律法以来、

説かれ続けてきた。神殿において多くの動物の犠牲の血が流され続けてきたのは、みな罪の赦しのためであった。しかし、イエスはご自身の血がそれに取って代えられたと宣言されたのである。それはただ一度だけ流され、永遠の贖いを全うするものであった(ヘブル9・12)。**多くの人** セムの表現で包括的な意味をもち、すべての人の意。**流される** 現在分詞形が使われており、イエスの赦しがいづの時代にも有効であることを表している。超越の食事の際にはパンと飲み物について、出エジプトに関する説明がなされてきた。同じように、ここではイエスがパンとぶどう酒について、十字架による贖いの契約の意味があることを説明している。

29 その日まで 終末の御国における宴会が催される日まで(黙示録19・6～8)。御国の民は、その時までイエスの贖いの死を覚え続けるために聖餐式を守り続ける。聖餐式は、過去になされたイエスの贖いのわざを振り返る時であると同時に、未来に約束されているイエスとのすばらしい宴席を待望する時でもある。そして今ここに臨在されるイエスを仰ぐ時である。

参考図書 2月18日分と同じ。

聖書

マタイ26・36〜46

タイトル

ゲツセマネの祈り

暗唱聖句

しかし、わたしが望むようにはなく、
あなたが望まれるままに、なさってください。

マタイ26・39

目標

神の御心に従って十字架に進まれたキリストを覚え、信じ、従う者となる。

導入

(今田雅子)

皆さん！ お祈りしてと思いますが、「みこころならば〇〇してください」っていう祈りを聞いたことあるかな？ イエス様が教えてくれた主の祈りにも「みこころが天になるごとく地にも…」ってあるよね。イエス様はよくお祈りされました。私たちも、イエス様が祈ってるようにお祈りするのが良いと思います。でも、今日のイエス様の祈りの様子は、それまでのイエス様とは全然違います！ イエス様に、いったい何が起きたのでしょうか？

悲しみと苦しみの中のイエス様の祈り

イエス様は弟子たちと一緒に、いつも祈っているゲツセマネという場所に行かれました。ゲツセマネに着くと

ペテロとヤコブとヨハネを連れてもっと奥の方に行かれ、祈りの場所に着いた時、今まで見たこともないような悲しみと悩みと苦しみがいっぱいの顔で三人に「わたしは悲しみのあまり死ぬほです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」と言われました。そして、イエス様だけ少し離れた所に行って、ひれ伏して祈り始められたのです。「わたしの父よ。許していただけるなら、この恐ろしい杯を取り去ってください！」これは、いったいどういう祈り？ それは「父よ、できれば十字架に架かりたくないんです！」と言うイエス様の心からの願いだったのです。手足を十字架に釘づけられ、血を流し、苦しんで死んでいく十字架。私たちと同じ体をもっておられたイエス様なので想像するだけで凄く恐ろしいものでした。いえそれ以上に、イエス様の十字架は私たち一人一人の、そして世界中のすべての人の罪を背負って、身代わりに神様の怒りと罰を受けるためのものだったのです、いつも一緒に歩んでいた天の父なる神様から引き離され、見捨てられて死ぬということとは、絶対に我慢できない苦しみだったのです。イエス様の心の痛みと苦しみ、悲しみの中の祈りの様子を、医者の方ルカは、

体から汗が血のしずくのように落ちた(ルカ22・44)と書いています。凄く苦しくつて悲しい祈りだったんですね。

イエス様は神様です。それと同時に私たちと同じ体をもつ人間としてこの世界に生まれてくださいました。なので、できたら苦しみたくない、逃れたいという弱さを全部だして祈られたのです。決してイエス様は何も恐れないで十字架に向かわれたのではないのです。こんな苦しみ、悲しみ、悩みを経験されたイエス様なので、私たちの弱さ、苦しみ、悲しみを知り、気持ちをわかってくださり、私たちの心に寄り添うことが出来るのです。

あなたが望まれるままに

イエス様はご自分の苦しい気持ちを、そのまま正直に打ち明けたあと、こう祈られました。「しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」と。イエス様は、ほかの何かと比べようもないほど優れていることは、父なる神様が望んでることだけになること。そして、それが、一番良い道だということ、よく知っておられました。だから、ご自分の思い通りになることを願わないで、すべて父なる神様のお心にお任せになり、「従います。」と決断されたのです。

凄いですね。皆さんだったらどうですか? 「そんな苦しみ、いくら神様が望んでも嫌だ!」 って思いませんか? それから、弟子たちの所に戻ると彼らは眠っていました。が、「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていない。霊は燃えていても肉は弱いのです。」と彼らをゆるし、励まされたのです。そして、二度目に「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」と祈られました。イエス様は、ご自分の苦しい気持ちを正直に伝えながら、父なる神様が計画していることを確かめ、そして何よりもみこころがそのまま行われるようにと祈られたのです。

まとめ

私たちも、イエス様のように、心の中の正直な気持ち、そのままを祈りましょう。心にある心配や悲しみや不満を、祈っていいんです。けれども、続いて「私が望むようにでなく、あなたが望まれるままに、みこころがなりますように」と祈ることを忘れないようにしましょう。イエス様のお祈りをお手本にして祈り、神様に喜ばれる人になっていきましょう。

♪イエスさまについていこう♪(ホ117、イン新100他)

聖書 マタイ26・36〜46 テーマ 決断の時の祈り

序論

(福井文彦)

イエスは、罪の身代わりの十字架の刑罰が、いかに苦しいものであるかをご存じでした。イエスはこのような刑罰を受けなくてすむ道と、父なる神のみこころに服従して刑罰を受ける道を知っておられました。その十字架を前にして祈られたのがこのゲツセマネの祈りです。そのため、この相反する二つの願いの間に板ばさみになってもだえ苦しめました。しかし、苦闘の末、自分の思いではなく、神のみこころに従われたのです。

一、苦しみの伴う祈り

福音書には、イエスの祈りの姿が多く記されています。私たちは、その祈りの姿から、主の大きな御業はこの祈りによって支えられていることを知ります。しかし、これまでのイエスの祈りとゲツセマネの祈りとは、ずいぶん違っています。

まず、この祈りの壮絶さに気づかされます。これまでにない祈りです。「静けき祈りの時はいと楽し」(新聖歌

190)とあります。本来、祈りには楽しい部分があります。しかし、ゲツセマネの祈りは全く違っていました。苦しみの伴う祈りでした。それは二つの語句に示されています。

一つは、イエスは「わたしは悲しみのあまり死ぬほです」と語っておられます。ルカでは「イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのよう地に落ちた」(ルカ22・44)とあります。これは死を恐れられたことを表しています。

もう一つは、「この杯をわたしから取り去ってください」(ルカ22・42)です。「杯」はこの場合、神の裁きを現しています(詩篇75・7〜8)。ここでは裁きを受けるイエスが、この杯を取り去ってくださいと祈られたのです。

二、十字架の苦しみ

なぜ、イエスはこれほどまでに「わたしは悲しみのあまり死ぬほです」と言って死を恐れられたのでしょうか。それはイエスが、これから起こる十字架の出来事がどのようなものであるかよく知っておられたからです。全世界の罪を一身に負い、世の罪を取り除く神の子羊と

して十字架にかけられるのです。その結果、父なる神との交わりの断絶を経験したことの無いお方が、神の怒りを受け、捨てられ、絶たれるからです。ほかのだれも味わったことの無い苦しみです。

初代教会のクリスチャンたちは喜んで殉教の死を遂げました。しかし、イエスは何の罪もないにもかかわらず（Ⅱコリント5・21）、罪そのものとなって、十字架上で裁かれ、苦しみもだえ、死んでくださったのです。

ですから、イエスが死を恐れられたのは、イエスの勇気の欠乏によるのではなく、十字架の苦痛の特別の意味の深さを良く知っておられたからなのです。そのため、苦しみもだえ、血のしたたりのように大粒の汗を流して、切々と祈られたのです。

三、神のみこころへの従順

イエスは十字架の苦しみを前にして、〈わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください〉と祈られました。私たちが祈りの中で、神への願いを言い表わすことは悪いことではありません。しかし、それは祈りの一面です。

それよりもっと大切なことは、祈りによって父なる神のみこころを知り、自分の意志を神に明け渡していくことです。イエスはゲツセマネの祈りにおいて、命をかけて、神に従うか否かを問われたのです。

イエスは神に従うなら、神に捨てられ、断絶される苦しみを経験しなければなりませんでした。しかし、イエスは苦しみを通して従順を学ばれたのです（ヘブル5・8）。その結果、神のみこころに従うイエスの決意が、サタンに勝利しました。

それで、人類のあがないのために十字架の道を選ぶかと問われたときに、「はい、従います」とお応えになりました。イエスの十字架における勝利は、このようにして与えられたのです。

結論

イエスは、ご自分が祈っているとき、眠っていた弟子に、〈誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていないさ〉と勧められました。自分の願い事を祈りつつ、どのようなときも、神のみこころがなされるようにと祈りたいものです。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

36 一緒に マタイのゲッセマネの祈りの記事の中で、他の並行記事と比較して目を引く表現の一つに、一緒に(ギ)メタ」という表現が多く見られることが挙げられる(36、38、40)。マタイは終始一貫インマヌエルの神を描いている(1・23、28・20他)が、ここでも同じである。しかし、この章での文脈においては、これから遺される弟子たちに対する愛の配慮の意味も併せ持っている。ゲッセマネ 「油しぼり」の意。ゲッセマネの「園」と言われているが、実際に美しい庭園があるわけではなく、オリーブ山一画にある多くのオリーブの木が茂っていたところ。オリーブの実がたくさん採れると、そのオリーブの実から油を搾るために人々が集まってきて働いた場所であることから、この名が付いたという説がある。キリストの受難物語の中で、このゲッセマネの名を明記しているのはマタイとマルコのみである。

37 ペテロとゼベダイの子二人 ゼベダイの子二人とは、ヤコブとヨハネ。彼ら三人は、しばしばイエスのみ

そば近くに同伴されるという特権に与っている(マタイ17・1、マルコ5・37)。^{あずか}

38 目を覚ましていなさい マタイによるゲッセマネの祈りの鍵となる言葉の一つ。40節にも繰り返し語られる。キリスト者には、イエスと共に見張りの役につくことが求められる。その時に座り込んでいてはならない。

39 ひれ伏して ユダヤ人は立つて祈る習慣があった(ルカ18・13)。しかし、ひざまずいて祈ることは、キリスト者の祈りの姿勢として定着していた(使徒7・60、9・40他)。これは、謙遜と祈りの切実さを示すだけでなく、この個所では「退き」と同様に、「別れて祈る」という側面も併せ持った祈りである(使徒20・36、21・5)。この杯 しばしば、旧約聖書では神の祝福(詩篇16・5、23・5)であると同時に、苦しみや神の裁きをも意味していた(詩篇11・6、イザヤ51・17)。しばしば「杯に受くべきもの」という表現があるが、天においては神の決定が既になされていて、それを喜びにしろ、苦しみにしる、神はそれらを与えようとしておられることを示す。マタイ20・22には、来るべき御苦しみと十字架をさして「わたしの飲もうとしている杯」という言葉が登場する

が、弟子たちはそれを理解しなかった。主は、明らかに来るべき受難と十字架を知っておられ、そのような苦い杯はできれば過ぎ去らせてくださいと願ったのであろう。わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるまに、なさってください。この祈りこそが、まさにゲツセマネの祈りの中心である。み心の成就の祈りは「主の祈り」の中の第三の祈りである（マタイ6・9～13）。マタイによれば、天国に入ることがゆるされるのは、神の「みこころ」を行う人だけである（マタイ7・21）。更に、ヨハネによれば、イエス来臨の目的が神の「みこころ」を行うためであることを、イエスご自身、み心のうちにもつておられた（ヨハネ6・38～40）。マタイのこの祈りでは、キリストでさえご自身の思いの成ることをお求めにならず、神ご自身のみ心と完全に一致されることを求められたのである。

41 誘惑（ギベイラスモス） この個所では「誘惑」と訳しているが、この言葉は「試練」とも訳すことのできる言葉である（ヤコブ1・2他）。試練も誘惑も、歩むべき道から人を引き離す危険をはらんだ苦しみである。悪魔はイエスを「誘惑」するが、み言葉に頼るイエスはそ

れを「試練」に変え、信仰を告白する機会としている（マタイ4・1～11）。誘惑を試練へと変える力はみ言葉と祈りである。だから「主の祈り」では、「誘惑」にあわせないようにと祈るのである。

42～43 この二回目の祈りの結論は「主の祈り」の言葉である。しかし、弟子たちはやはり眠りこけていた。イエスは弟子たちからも捨てられた。

45～46 主のゲツセマネでの孤独な祈りを通して、神のみ心へと進まれる主の決意が、今や不動のものとなった。ゲツセマネの祈りは、この結論へと導かれるまでにいかなる内的戦いが求められたかという事情を物語っている。「時」とは、神のみ心のなる「時」のことであり、これらのなりゆきのすべてを神ご自身が主宰しておられることを言外に語っているのである。そのみ心への服従の一点において、イエスの心は定まったのである。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』（いのちのこ
とば社）・ A. T. Robertson 「Word Pictures in the New
Testament」 (BROADMAN) 他

聖書

マタイ27・45〜56

タイトル

十字架上のイエス

暗唱聖句

わが神、わが神、どうしてわたしをお見

捨てになったのですか。 マタイ27・46

目 標

身代わりの十字架の意味を知り、キリストを信じて救いを得る。

導入

(和田牧子)

今週は受難週といって、イエスさまが十字架へとすまされた一日一日を心におぼえる特別な週です。皆さんはイエスさまが十字架にかかれることを想像するとどんな気持ちになりますか。先生はなんと読んでも十字架のシーンは心が重くつらい気持ちになります。皆さんはいかがですか？ でもこの十字架にこそ天のお父さまである神さまの大きな愛がこめられているのですね。

十字架への道

イエスさまはお弟子さんのひとりユダにうらぎられ、銀貨三十枚で祭司長たちや長老たちに売られてしまいました。なんで？ と思いますよね。彼らはイエスさまがあまりにもすばらしい神さまのおはたらきをし、人々の人気を

集めていたのでねたましく思い、殺したいほどにくんでいたのです。

大人気だったはずのイエスさまなのに、人々はそういうえらい人たちに説得されて、イエスさまを「十字架につける」「十字架につける」とはげしく叫び続けました。総督ピラトはイエスさまが十字架にかけられるような悪人どころかほんとうは正しい人であると知っていましたが、人々のつよい叫びにこん負けして十字架につけるために引きわたしてしまったのです。

兵士たちはとげがいっぱいのいばらで冠^{かんむり}をあみ、イエスさまの頭におきました。そしてイエスさまにつばをかけたり、あしの棒で頭をたたいたりしたのです。そしていよいよゴルゴタという場所でイエスさまは十字架につけられました。頭からも身体からいっぱい血が流れました。私たちがこんな目にあつたらどうですか？ ことばにならないほどのいたみ、悲しみ、苦しみで、とても耐えられませぬね。

神さまに見捨てられたの？

イエスさまが十字架にかけられて、お昼の十二時ごろから三時まであたりは暗やみでいっぱいになりました。それ

は光である神さまのおすがたがまったく見えなくなった私たち人間のくらい心をあらわしているかのようです。「神さまなんか知らない」「神さまなんか信じない。」と背中を向けた人間の心はくらくらやみでいっぱいなのです。

午後三時ごろになりました。イエスさまは大声で「エリ、レマ、サバクタニ」とさげられました。これは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。「神よ！ あなたは私のお父さんではないのですか？ どうしてあなたの息子である私をお見捨てになったのですか？」。十字架の上でイエスさまは身体中がはりさけんばかりのいたみでいっぱいでした。それにもまして、愛するお父さんから見捨てられ、その関係がたたれてしまったことが、すべての望みがたれることだったのです。そして最後にもう一度大声でさけんで、ついに息を引きとられました。

十字架の死は私たちのために

どうして神さまはイエスさまがこのような苦しみにあうままにされたのでしょうか。イエスさまが十字架上で苦しんでおられたとき、多くの人たちがそれを見ていました。ある人はあざけるように、また、イエスさまと親しかった

女性たちや弟子は悲しみにくれながら。しかし天のお父さまはだれよりもイエスさまのいたみ苦しみにともなうめき、悲しんでおられたのです。それならなぜ？ 聖書の別の箇所には「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて神の義となるためです。」（Ⅱコリント5・21）とあります。神さまに背を向けて、自分中心のあゆみしかできない私たち人間を、神さまは愛して愛して、その罪をゆるし、その罪から自由になれるようにと、愛するみ子を十字架につけられたのでした。

イエスさまが私たちの救い主だと言えるのは、罪のゆるしの道となつてくださっただけでなく、どんな苦しみにもましてつらく苦しい十字架刑にあい、死んでほうむられてくださったからこそ、私たちのどん底と思うようないたみ悲しみを思いやつてくださり、ともにいてくださる方だとわかるからです。

来週はいよいよイースター、イエスさまのご復活をお祝いする日です。十字架をおもい、ご復活をよろこびながらこの一週間を過ごしたいですね！

♪フリー♪（イン40、イン新48、PW56）

聖書 マタイ27・45〜56 テーマ 十字架上のイエス(棕櫚の日)

序論

(石田高保)

イエス様は十字架上で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれました。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。受難週に入るにあたって、十字架上で言われた一つの言葉に目を留めます。主は十字架で七つの言葉を残しておられます。今日の金言は第四番目で、ちょうど真ん中の言葉です。この意味するところは何かでしょうか。

一、神に見捨てられて下さった

この言葉は、詩篇^{しへん}22篇の冒頭の言葉を唱えたのであると言われています。実際読んでみると、十字架上のイエス様本人でなければ味わえない苦しみが生々しく記されています。この詩篇を書いたのはイエス様よりも千年前のダビデです。彼が敵に追われて苦しめられた中で神の救いを体験したことを記したものです。しかしダビデはそれと知らず、千年後のキリストの死を神の靈感によって預言しています。当然、イエス様自身、この詩篇は十

字架を預言したものと認識しておられたはずです。

それにしてもどう読んでもこの言葉は絶望を表しているようにしか思えません。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」、これは神様に対するイエス様の祈りと言ってよいのかどうか、考えさせられるところです。明らかにお願いや嘆願ではなく、ふつうの祈りとはまったく違います。魂の底からこみ上げるうめきと叫びのようなものでしょう。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」、これはアラム語でイエス様がふだん使っていた言葉の音をそのまま写し取ったものです。私たちも十字架の下にいてイエス様の声をじかに聞くような臨場感があります。神様にご自分の率直な思いをぶつけている感じがです。いつも呼びかけている「わが父よ」ではなく「わが神よ」というよそよそしい言い方で、イエス様にとっても父なる神様が遠ざかってしまったようです。「なぜあなたがこの私を見捨ててのですか、ありません、全く理解できません」。「神よ、あなたはどこに行ってしまったのですか」。このときイエス様は、神様から明らかに見捨てられたと受け取っておられます。(十二時から午後三時まで闇が全地をおおった)、だれも

経験したことの異なる様な暗黒が真昼の三時間を支配しました。これは神様がイエス様から顔をそむけた現れだと言われます。やがて不信者の行く神の存在しないゲヘナ（地獄）を味わっておられます。私たちも神様がどこにおられるのかと叫びたくなることがあるでしょう。神が御子を見捨てるとはほんらい絶対にありえないことです。なぜなら父なる神と御子は一体だからです。しかしこのとき、永遠に一度だけ神様とイエス様の関係が分断されました。神様は主を断腸の思いで見捨てたのです。

二、罪を負って下さった

イエス様は世界でただひとり、神から見捨てられる資格があつたと言われています。罪の全くない人間だけが全時代、全世界の人間の罪を贖うことができる、贖う資格がある、つまり見捨てられる資格があるわけです。実は46節の言葉がイエス様の口から発せられなければならない。私たちの身代わりとなつたことの裏づけが取れません。この言葉こそが、私たちの罪の贖いが完成したことを証明しています。ですから十字架上の七言の中で最も直接に贖いに関係しています。「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方に

あつて神の義となるためです」（Ⅱコリント5・21）。神様は私たちの罪を贖うために、無実で潔白のイエス様を十字架にかけてあえて罪人にして罰しました。つまり見捨てたわけです。その目的は罪深い私たちが神から義とされるため、神の子どもとして完全に受け入れられるためです。46節の言葉は主が私たちの身代わりとなつて罪の贖いをして下さった霊の事実を証明しています。

またこのみ言葉はイザヤ53章の預言の成就でもあります。「彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。：彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された」（イザヤ書53・4、5）。私たちの病氣も怪我も、罪も過ちも、苦しみも悩みも主は十字架で体感し、極みまで苦しんで下さいました。

結論

ですから私たちが苦しむとき、主と一緒に苦しんで下さっています。私たちが悩むとき、イエス様と一緒に悩んでいてくださいます。私たちが悲しむとき、主もまた一緒に悲しんで下さっています。主の知らない悲しみも、苦しみも地上にはないのです。一緒に生きてくださるイエス様に目を向けましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

45 闇が全地をおおった 暗やみは出エジプトの災厄の一つであり(出エジプト10・22)、終わりの日に起こることとして、預言書に記されている(アモス8・9、イザヤ13・10等)。続く節は、この暗黒がイエスと父なる神との断絶の表れであることを暗示している。満月である過ぎ越しの季節に日食は考えられない(日食が起こるのは新月の時のみ)。中東の局地風「カムシン」による砂ぼこりが太陽を遮ったのかもしれない。

46 エリ、エリ、レマ、サバクタニ 詩篇22篇の冒頭部分。「エリ」のみヘブル語(アラム語では「エロイ」)で、それ以外を当時の日常語であるアラム語。これは単なる詩篇の朗誦(ろうしょう)ではなく、まさにその時、イエスが経験していたことであつた。肉体的激痛、精神的屈辱もさることながら、ゲツセマネの祈りにおいてイエスが何よりも恐れていた「杯」(26・39)は、この御父との断絶であつた。

しかしそれは、贖罪(しよくざい)の成就のためには、どうしても飲み干されねばならない杯であつたのである。

47 この人はエリヤを呼んでいる ヘブル語の「エリ」がエリヤに聞こえたのだろう。当時のユダヤでは聖徒が助けを必要とするとき、エリヤが現れるという言い伝えがあつた(11・14参照)。

48 酸いぶどう酒 ローマ兵が飲用した、ワイン酢を水で薄めた飲料であろう。マルコでは、エリヤが登場するかを見るために、兵が悪意をもって飲ませようとした印象を受けるが(マルコ15・36)、マタイではそういう印象は受けない。いずれにせよ「彼らは私に渴いたときには酢を飲ませました」(詩篇69・21)という預言の成就である。ちなみに「没薬を混ぜたぶどう酒」(マルコ15・23)は苦痛を緩和させるためのもので、別物である(イエスはそれを拒まれた)。

49 エリヤが救いに来るか見てみよう 興味本位もあるだろうが、人々がイエスを、(言い伝えが正しければ)エリヤが助けに来るような義人と認めていたことが示されている。

50 霊を渡された ヨハネ福音書は「霊をお渡しになつた」(ヨハネ19・30)と記す。「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。』こう言つて、息を引き取られ

た。」(ルカ23・46、参考・詩篇31・5)と記すルカ福音書と同様、マタイ、ヨハネもまた詩篇31・5「私の霊をあなたの御手にゆだねます」を念頭に置いていると言えるだろう。

51〜53 神殿の幕が上から下まで真つ二つに裂けた 至聖所の前に設けられた「第二の垂れ幕」(ヘブル9・3参照)。「裂けた」の動詞は受動態で、動作の主体が神であることを示している。至聖所は、年に一度、大祭司ただ一人が、自分と民の罪の贖いのために入ることを許される所(ヘブル9・7)である。その隔ての幕が裂けたことは、イエスの死によって、旧約の祭儀は終焉を迎え、新しい時代が始まったことを象徴している。今や、罪のための最上の犠牲がささげられた。「私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます」(ヘブル10・19)。地が揺れ動き マタイだけが、イエスの死の後に地震があったことを記している。眠りについていた多くの聖なる人々の中から生き返った：イエスの復活の後で、墓から出て来て：多くの人に現れた 出来事の前後関係が難解だが、様々なことを考慮すると、ここで言われている地震は実際には、イエスのよみがえりの後

(28・2と同じ地震)のことかもしれない。聖徒たちの復活は、その時実際にあったのかもしれないが、やがて起こる聖徒のよみがえりの現実を象徴する表現として、ここに記されているのかもしれない。いずれにせよ、この記述がここに置かれていることは、聖徒のよみがえりが、イエスの十字架と復活に直接に依存するものであることを象徴している。イエスが死に、そして復活されたゆえに、彼を信じる者の復活もまた確かにされるのである。

54 この方は本当に神の子であった イエスの神的な性質と無実性、そしてローマ(ならびにユダヤ)の罪深さを認める告白であろう。この告白が異邦人によってなされたということは皮肉であると共に、救済史的な転換点(異邦人への救い)を指し示すものでもある。

55〜56 そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた 最後まで主の苦しみを見届けたのは、女性たちであった。主に対してより大きな忠誠心を表した彼女たちが、数日後、主の復活という至上の喜びを最初に伝えるという光栄にあずかることになる。

参考図書 1月21日分と同じ。

聖書

マタイ28・1〜10

タイトル

永遠の希望と喜び

暗唱聖句

ここにはおられません。前から言っておられたとおり、よみがえられたのです。

マタイ28・6

目標

復活のキリストによつて失望や恐れを喜びに変えて頂く。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、葬式に参列したことありますか？ もしかしたら、おじいちゃんやおばあちゃん、親しくしていた人を亡くした経験がある人がいるかもしれません。それは本当に辛くて悲しいことだったでしょう。

今日の個所にも、悲しみの中に落とされた人たちが出てきます。でも、その深い悲しみが永遠の喜びに変えられたのです。

十字架にかかれたイエス様

先週は受難週でイエス様が私たちの罪のために十字架にかかり死んでくださったことを深く心に留めるときでした。イエス様は、罪に苦しめられている私たちを自由

に、そして幸せにするために、十字架から逃げることをしないで進んで行かれたのです。

イエス様は、苦しくて残酷な十字架にかかる前にも、顔を背けたくなるような辛い体験をされました。それは、親しい者から裏切られ、多くの人たちからバカにされ、鞭打たれ、徹底的に侮辱されたのです。そして最後は、手足に釘を打たれ、頭には茨の冠をかぶせられ十字架に付けられました。イエス様はその十字架の上で血を流しながら死ぬまで苦しまれたのです。

神様であり、何も罪を犯したことの無いイエス様が、どうしてこれほどまでに苦しまなければならなかったのでしょうか。それは、私たちの罪がそれほど恐ろしく、私たちを苦しめるものだからです。イエス様は、その罪のすべてを負われ苦しまれたのです。

皆さんは、罪がどんなに恐ろしいものであるかを知っていますか？ 罪を簡単に見ないでください。罪を心の中に残さないでください。罪はあなたを苦しめます。イエス様の十字架だけが、私たちを罪から解放します。

墓に葬られたイエス様

イエス様の弟子たちは、イエス様を裏切つて逃げて行

きました。でも、大勢の婦人たちはイエス様の最後を見届けたのです。婦人たちは、今までずっとイエス様を慕い従っていました。そのイエス様が目の前で苦しみながら死んで行く姿を見て、どのような思いだったでしょうか。彼女たちは悲しみのどん底に突き落とされてしまいました。

ヨセフという人が、イエス様の遺体を引き取り亜麻布で包み、墓に納めました。当時の墓は、岩を掘って作った穴で、入り口には大きな石を転がしてふたをしていました。ヨセフがイエス様の遺体を墓に納めた後、一緒にいたマグダラのマリヤともう一人のマリアは、墓に残りそこに座ったのです。彼女たちは、悲しみでいっぱいであつたに違いありません。また、イエス様を生き甲斐としていた彼女たちは、生きる希望を失ってしまったでしょう。涙がかれるほど墓の前で泣いたでしょう。

もし、私たちも死んで墓に納められて終わりなら、そこには悲しみと失望しかありませんね。

よみがえられたイエス様

イエス様を信じる人にとって「死」は、悲しみと失望で終わりません。それは、よみがえりがあるからです。

イエス様が死んでから三日目に、マグダラのマリヤたちは、イエス様の墓に行きました。すると、大きな地震があり、御使いが現れました。そして婦人たちに「あなたがたは、恐れることはありません。イエスはよみがえられたのです」と告げました。今まで悲しみと失望の中にいた婦人たちでしたが、イエス様がよみがえられたことを聞いて、とても喜んだのです。そして、それを弟子たちに伝えに行く途中、よみがえられたイエス様に出会うことができました。イエス様に出会った彼女たちの喜びを皆さんが表現するなら、どんな表情でどんな声でその喜びを表しますか？ 皆さんならイエスのよみがえりを誰に伝えに行きますか？

まとめ

このよみがえられたイエス様を心から信じている人は、苦しく悲しいことがあつたとしても、イエス様のよみがえりの中にある希望と喜びをもって生活することができます。この希望と喜びは永遠に続く恵みなのです。よみがえりのイエス様は、この喜びを与えてくださいます。皆さんはもうこの恵みを知っていますか？

♪すくいの主イエスに♪（ホ95、イン新45他）

聖書 マタイ28・1～10 テーマ ミイエスの復活

序論

(小泉 創)

春は、新しいことが始まる期待と不安が入り交じる季節です。新型コロナウイルスの影響で学校や仕事のやり方、教会に集まることも制限されたとき、これからどうなるかわからずとても心配でした。危機的な出来事が起こると、狭いところに閉じ込められて自由を失ってしまったように感じます。人の弱さをひしひしと感じます。

一、悲しみと恐れの中で

イエスが十字架で死なれ、墓に葬られてから三日目の朝、墓を見に来たのはマグダラのマリアとほかのマリアでした。この女たちの足取りは重かったのです。希望の象徴であったイエスは彼女たちの目の前で、死なれて墓に葬られました。すべての希望であったイエスを失ってどうしたらよいでしょうか。女たちにできることといえ、せめてイエスのからだに油をぬってさしあげること、

そして時間をかけてその死を受け入れていくことしかありませんでした。死を前にして、何も期待できず、すべてのものはむなしく見えるばかりです。彼女たちも悲しみと恐れに囲まれているのです。イエスが語っておられた復活の約束を、女たちが心にとめている様子は描かれていません。神は悲しみと恐れにとらわれた者たちにどのように触れてくださったのでしょうか。

二、いじこにはおられない

静かな朝、墓についた彼女たちの目の前で、想像も出ないことが起きました。大きな地震と共に、主の使いが登場し、生きているものと死んでいるものとを隔てている墓の石が転がされたのでした。

屈強な番兵たちでさえ、恐ろしさを感じ震え上がり、死人を守っていたつもりが、逆に死人のようになりました。そして御使いは恐れおののく番兵を尻目に、女たちに向かって「あなたがたは、恐れることはありません」と告げました。十字架につけられたイエスを捜しているのはわかっていますが、主がおられるのはここではないのです、と。

三日前にイエスがそこに葬られ、番兵が守り、石が入り口をふさいでいた墓の中に、すでにイエスのからだはありませんでした。すべてのものの終着点であるはずの墓は、空でした。

女たちは、墓の前に自分たちもこの死の中にとじこめられていると思っていたことでしょう。私達も罪と死が支配するやみの中にとどまっていけないでしょうか。墓の石はころがされているのに、光の差すところが見えてくるのに、顔を伏せたままではないでしょうか。御使いの声は、私達にも語られています。いのちの主は、絶望の中、死の中に閉じ込められています。あなたがたも墓の中をのぞき続けるのをやめなさい。

三、復活のキリストによる喜び

女たちにはすべてのことを理解できたわけではなかったのですが、目の前で起きていることと、御使いの言葉は彼女たちに新しい希望を与えてくれました。恐ろしさは感じましたが、同時に大いに喜びました。

仲間の弟子たちにこのニュースを届けようと走り出した彼女たちの前に、よみがえられたイエスが現れて下さい

ました。御使いの言葉どおりでした。愛する主の「おはよう」という声は、新しい朝が始まったことを告げる言葉でした。死は打ち破られました。やみが支配する夜はおわりました。十字架で死なないことよりも、もっと素晴らしいことが、神によつてなされました。自分達が思っていた以上に神の力は強く、イエスはすべてのことに勝利してくださいました。永遠のいのちにつながる新しい一日が始まったのです。

結論

私たちの前にも、現実の大きな問題があります。しかし、死にすら勝利してくださった主は、私たちと共にいてくださいます。よみがえりの主は、私達が閉じ込められている失望、恐れの中から、私達を連れ出して下さいます。この春、私達がおかれている場所がどのようなものであったとしても、よみがえりの主、勝利の主が、共にいて下さり、素晴らしいわざをすすめてくださることに期待いたしましょう。

研究資料

(中島啓一)

福音書記者たちは、復活の場面を直接には描いていない。最初の証言は、空の墓^{から}という証拠を伴った、天的な存在(マタイでは「主の使い」)による報告である。もちろん墓が空でなければ、教会がイエスの復活を信仰の中心に据えることは不可能であった。しかし空の墓は逆の立場の論拠にもなり得る(28・13)。それ単独では、信仰のきつかけとはなっても、復活の確固たる証拠にはなり得ない。復活のイエスと会った者の目撃証言が不可欠なのである。その最初の証人となったのが女性たちであった。この聖書の女性観は、その時代の女性観を全く覆すものであったと言える。現代と比べて女性の証言が著しく軽んじられていた時代背景の中で、もし福音書が人の手による創作であったならば、この重要な役割は、決して女性には託されなかったであろう。逆説的であるが、このこともまた、主の復活と、それにまつわる聖書の記述の信頼性を力強く証しするものであると言える。

テキスト

1 安息日が終わって 安息日は土曜日の日没をもって

終わるが、安全と視界確保のために、週の初めの日の明け方 まで待たねばならなかった。マグダラのマリア全福音書が復活の最初の証人として挙げている。もう一人のマリア 「ヤコブとヨセフ」(27・56、マルコ15・40では「小ヤコブとヨセ」)の母であろう。「クロパの妻マリア」(ヨハネ19・25)と同一かも知れない。墓を見に行つた 亡骸に香料を塗るため(マルコ16・1)。

2 主の使いが石をわきに転がし 女性たちが墓に入るためであつて、イエスが墓から出るためではない。その上に座った 死の象徴である墓石の上に座することは、死に対する勝利をあらわしている。

4 番兵たち 祭司長たちの意向を受けて墓の番をしていた(27・62・66)。その恐ろしさに震え上がり、死人のようになつた 大きな地震に加えて、光り輝く御使いの姿は、彼らを恐れさせるに十分であつた。体が硬直し、気絶したのであろう。死人の番をしていた彼らが死人のようになり、彼らが守っていた死人が死からよみがえつたことは、極めて皮肉なことであつた。

5・6 恐れることはありません 直訳すると「彼らのように」あなたがたまで恐れてはならない」。十字架

につけられたイエス：ここにはおられません 死者の中にイエスを見出そうとするならば、彼らのようになる。捜す場所はここではない。前から言っておられたとおりイエス自身が復活を予告していた（16・21、17・23等）。**よみがえられたのです** 直訳は「よみがえらされた」（受動態）。動作主は、言うまでもなく神。イエスの復活は父なる神のみわざである。納められていた場所を見ない 御使いは女性たちに、イエスの体がそこにあることを確認させる。しかし復活への信仰は、空の墓という事実だけから起こるものではない。そのため、後にイエスがご自身を現してくださるのである。

7 弟子たちに伝えなさい 女性たちは御使いから、弟子たちへのメッセージを託された。イエスは死人の中から**よみがえられました**（「神によって」よみがえられた）（6節と同じ）。これこそが教会の信仰告白の礎石である。あなたがたより先にガリラヤに行かれます：26・32参照。イエスもすぐ後で同じことを語られる（10）。私は確かにあなたがたに伝えました 以上の言葉が、神からの権威ある啓示であることを強調している。

8 恐ろしくはあったが大いに喜んで 女性たちはなお

恐れつつも「この上ない喜び」（2・10と同じ）で満たされた。急いで墓から立ち去り 女性たちは、「急いで行つて」（7）という命令に、その通りに応答した。

9 イエスが：彼女たちの前に現れた 女性たちへの復活のイエスの顕現はこの福音書のクライマックスの一つである。彼女たちは、復活の主を最初に目撃するという特権にも与つたのである。その足を抱き、イエスを拝した イエスが復活されたという事実だけでなく、復活がイエスの言葉と活動とを立証するものであるゆえ、女性たちはイエスを礼拝せずにはいられなかったのである。

10 イエスは言われた： 御使いと同じメッセージを、イエスご自身も女性たちに託した。兄弟たちに イエスはたびたび弟子たちを兄弟と呼ばれた（12・50、25・40、ヨハネ20・17等）。見落としてはならないのは、弟子たちがイエスを見捨てて逃げた後にもかかわらず、彼らを「兄弟たち」と呼び続けておられることである。ここにも神の大いなる愛と赦し（ゆる）が表されている。

参考図書 1月21日分と同じ。

神を信じる生涯

イザヤ 40・26

● 年末年始

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

1月7日 新年礼拝 主は羊飼ひ

詩篇 23：1～6

同1節

● キリストの十字架への道

1月14日

ペテロの信仰告白

マタイ 16：13～20

同16節

21日

十字架を負って

マタイ 16：21～26

同24節

28日

山上での変貌

マタイ 17：1～8

同5節

● 復活

2月4日

子どものように

マタイ 18：1～5

同3節

11日

金持ちの青年の悲しみ

マタイ 19：16～26

同26節

18日

仕える生き方

マタイ 20：20～28

同28節

25日

エルサレム入城

マタイ 21：1～11

同5節

3月3日

一番大切な戒め

マタイ 22：34～40

同37節

10日

契約の血

マタイ 26：26～29

同28節

17日

ゲッセマネの祈り

マタイ 26：36～46

同39節

24日 棕櫚の日

十字架上のイエス

マタイ 27：45～56

同46節

3月31日

イースター

主イエスの復活

マタイ 28：1～10

同6節

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<https://cs.jccc.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇二三年度Ⅳ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は東播磨中央教会の吉田美穂師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇九年度Ⅱ巻に掲載された後藤真師の原稿に、後藤真師がこのたび新たに一部修正加筆されたものを、編集して再掲させていただきます。「牧羊ひろば」はお休みしました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセージ例

聖書講解

研究資料

ワーク(A)(B)(C)

中高科へのヒント

子ども聖書日課

フラッシュカード

み言葉カード・イラスト

ワークプロ打ち込み

校正

また、事務作業・発送の教団事務所の光田隆代師はじめ、佐藤由香姉他姉妹方、組版の松木共栄印刷、印刷のプリントバックに心から感謝いたします。(後藤健一)

和田牧子師 後藤真師 土屋開夫師

飯田勝彦師 今田雅子師 中島啓一師

石田高保師 宮澤清志師 福井文彦師

小泉創師 高橋頼男師 宮澤清志師

小平徳行師 中島啓一師 宮澤清志師

辻林和己師 井上義実師 吉田美穂師

鎌野幸師 宇野真佑美師 竹崎光則師

石川剛士師 三輪直子師 田中裕明師

山下大喜師 勝田幸恵師 後藤淳子師

八幡直人師 上森恭子師 松浦あん姉

三輪正見師 金田高保師 松浦あん姉

田中愛子師 石田ゆり師 松浦あん姉

柴田福音師 後藤栄子師 松浦あん姉

丹羽遥姉 後藤栄子師 松浦あん姉

柴田福音師 後藤栄子師 松浦あん姉

丹羽遥姉 後藤栄子師 松浦あん姉

後藤健一師 後藤健一師 松浦あん姉

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇二三年度Ⅳ巻

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
印刷所 株式会社プリントバック

電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-5511

印刷所 株式会社プリントバック
聖書新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号 4-2-1750号